

松葉園遺跡 4

— 第2・3次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第199集

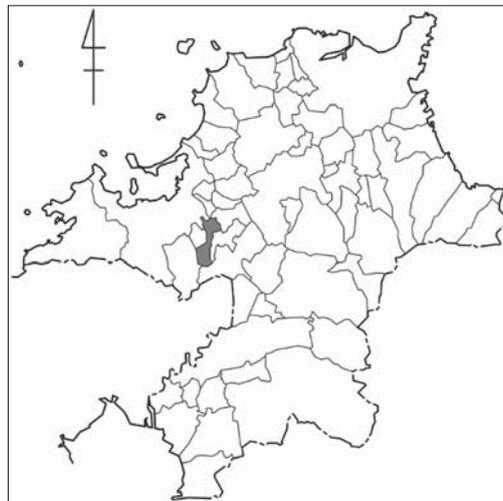
2022

大野城市教育委員会

まつ ば ぞの
松葉園遺跡 4

— 第2・3次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第199集



2022

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の南部に位置していて、市域は南北に細長いひょうたん形をしています。市の東部には四王寺山とそれに連なる山脈があり、特別史跡大野城跡が立地しています。また、市中央部は御笠川が北流して河岸段丘による平地を形成し、太宰府市との境に特別史跡水城跡があります。さらに、南部には牛頸山を含む山間地があり、史跡牛頸須恵器窯跡が所在するなど、自然と歴史に恵まれた街です。

今回報告するのは、開発に伴い実施した松葉園遺跡第2・3次発掘調査の成果です。松葉園遺跡は市の東部にあり、これまでの調査で後期旧石器時代から中世まで続く遺跡であることが知られています。今回の調査では、弥生・古墳時代の住居跡や溝跡、中世の土坑墓などが確認され、当該地の歴史の一端が明らかとなりました。

近隣には地域を代表する群集墳である善一田古墳群、須恵器生産を行っていた乙金窯跡、古墳時代・中世の集落や墓が調査された薬師の森遺跡などがあります。これらの遺跡と併せて考えると、今回の調査成果は地域史を語る上で重要なものといえるでしょう。

本報告書により発掘調査の成果が、今後教育や研究の面におきまして広く活用していただけることを願っております。

最後に、発掘調査に際してご理解、ご協力をいただいた地権者をはじめとする関係各位、また多くのご指導を賜りました皆様に厚くお礼を申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、大野城市乙金1丁目に所在する松葉園遺跡第2次調査および第3次調査の成果についての報告である。
2. 発掘調査は、大塚健児（第2次調査）および株式会社シダー（第3次調査）の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は徳本洋一が担当した。
4. 遺構写真は徳本が撮影した。遺構図は徳本が作成したほか、株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。
5. 遺物写真は写測エンジニアリング株式会社に委託し、牛嶋茂が撮影した。
6. 遺物実測図は白井典子、仲村美幸、小嶋のり子、松本友里江、津田りえ、氷室優、古賀栄子、篠田千恵子、小畑貴子、上田龍児、山元瞭平、齋藤明日香が行った。
7. 製図は小嶋が行った。
8. 観察表は小嶋・石川健が作成・編集した。
9. 遺物番号は通し番号とし、挿図と図版で統一した。
10. 本書で言及したパンコンテナの大きさは内法で54×34cm、深さ15cmである。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行の1/25,000地形図『福岡南部』を基に作成した。
12. 遺構図中の方位については、原図で磁北であったものを真北に補正したものである。
13. 遺物の名称のうち、輸入陶磁器については太宰府分類（太宰府市教育委員会『大宰府条坊XV』2000年 太宰府市の文化財第49集）を用いる。
14. 出土遺物、調査実測図・写真等の資料は大野城市教育委員会で保管している。
15. 本書の執筆は、I・III・IV章を林潤也・石川・上田、II章を石川、IV章1・4を林、IV章2・3を上田、編集を石川・林が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査体制	1
II. 位置と環境	3
III. 第2次調査の成果	
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	6
IV. 第3次調査の成果	
1. 調査概要	20
2. 遺構と遺物	21
V. 総括	
1. 時期ごとの様相	27
2. 移動式カマドの位置づけ	28
3. 松葉園遺跡の一括遺物の意義	33
4. 中世墓の位置づけについて	35

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第2図 松葉園遺跡第2・3次調査区位置図 (1/2,500)	5
第3図 松葉園遺跡第1～3次調査区位置図 (1/400)	6
第4図 第2次調査区遺構配置図 (1/200)	7
第5図 第2次調査 SC01 実測図 (1/40)	7
第6図 第2次調査 SC01 出土遺物実測図 (1/3、8：1/2)	8
第7図 第2次調査 SD01 断面実測図 (1/40)	9
第8図 第2次調査 SD01 出土遺物実測図 (1) (1/3)	10
第9図 第2次調査 SD01 出土遺物実測図 (2) (1/4、32・33：1/3)	12
第10図 第2次調査 SD01 出土遺物実測図 (3) (1/6)	13
第11図 第2次調査 SD01 出土遺物実測図 (4) (1/4)	14
第12図 第2次調査 SD01 出土遺物実測図 (5) (1/4)	15
第13図 第2次調査 SD02 断面実測図 (1/40)	16

第 14 図	第 2 次調査	SD02 出土遺物実測図 (1/3、45・46：1/4)	17
第 15 図	第 2 次調査	SD03 断面実測図 (1/40)	18
第 16 図	第 2 次調査	SD04 断面実測図 (1/40)	18
第 17 図	第 2 次調査	SD04 出土遺物実測図 (1/3)	18
第 18 図	第 2 次調査	SK01 実測図 (1/40)	18
第 19 図	第 2 次調査	SK01 出土遺物実測図 (1/3)	19
第 20 図	第 2 次調査	ピット出土遺物実測図 (1/3、62・63：1/2)	19
第 21 図	第 3 次調査区	遺構配置図 (1/200)	20
第 22 図	第 3 次調査	SC01・02 実測図 (1/40)	22
第 23 図	第 3 次調査	SC02 出土遺物実測図 (1/3)	23
第 24 図	第 3 次調査	ST01 実測図 (1/20)	24
第 25 図	第 3 次調査	ST01 出土遺物実測図 (1/3)	24
第 26 図	第 3 次調査	SK02～06 実測図 (1/40)	25
第 27 図	第 3 次調査	SK02・03 出土遺物実測図 (1/3)	25
第 28 図	第 3 次調査	ピット出土遺物実測図 (1/3)	26
第 29 図	移動式カマドの型式分類 (S = 1/12)		29
第 30 図	北部九州における古墳時代の移動式カマド分布図		30
第 31 図	移動式カマドの住居出土状況 (遺物：S = 1/20、遺構：S = 1/200)		31
第 32 図	貿易陶磁器を埋納した中世墓分布図 (1/8,000)		36

表目次

表 1	乙金地区周辺の中世墓関連遺構 (9～14 世紀)	36
	出土遺物観察表	38

図版目次

図版 1	第 2 次調査 SD01 出土遺物	図版 3	(1) 第 3 次調査区全景 (A 区北半)
図版 2	(1) 第 2 次調査区全景 (北半)		(2) 第 3 次調査区全景 (A 区南半)
	(2) 第 2 次調査区全景 (南半)		(3) 第 3 次調査区全景 (B 区)
	(3) 第 2 次調査 SC01 全景		(4) 第 3 次調査 SC02
	(4) 第 2 次調査 SC01 遺物出土状況		(5) 第 3 次調査 ST01 全景
	(5) 第 2 次調査 SD01		(6) 第 3 次調査 ST01 遺物出土 状況近景
	(6) 第 2 次調査 SD01 遺物出土状況近 景		(7) 第 3 次調査 SK02 全景
	(7) 第 2 次調査 SD02 断面		(8) 第 3 次調査 SK02 遺物出土状況
	(8) 第 2 次調査 SK01		
		図版 4～9	出土遺物

I. はじめに

1. 調査にいたる経緯

松葉園遺跡は大野城市乙金1丁目に広がる遺跡であり、主に弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が発見されている。

遺跡発見の契機は、1979（昭和54）年、畑の中で石棺墓が発見されたことによるもので、一部緊急調査（石棺墓の実測）を実施した。その後、同地は集合住宅建設に伴い1997（平成9）年に発掘調査（第1次調査）が行われ、石棺墓3基のほか弥生時代中期後半を中心とする住居跡、溝、祭祀土坑などが検出された（大野城市教育委員会2003）。

第2次調査 乙金1丁目781-1に所在する。共同住宅の建設計画に伴い2003（平成15）年8月26日に試掘調査を実施し、地表下35～70cmで土坑やピットを確認した。計画どおり共同住宅が建設された場合、遺跡を保護することができないため、事業地全面を発掘調査することとなった。調査は同年9月16日から同年11月28日まで行い、調査面積は240㎡を測る。

第3次調査 乙金1丁目784-1・2、785-2に所在する。医療施設建設計画に伴い2007（平成19）年7月18日に試掘調査を実施し、地表下20～80cmで溝や土坑などを確認した。計画どおり医療施設が建設された場合、遺跡を保護することができないため、事業地全面を発掘調査することとなった。調査は同年8月20日から同年11月1日まで行い、調査面積は450㎡を測る。

調査費用については両調査ともに事業主と市の折半とし、報告書作成については2021（令和3）年度に大野城市の一般財源を用いて実施した。

2. 調査体制

第2次および第3次発掘調査時の調査体制および整理・報告時の体制は以下のとおりである。

平成15年度（第2次調査）

大野城市教育委員会

教育長	堀内貞夫（～6月）、古賀宮太（6月～）		
教育部長	鬼塚春光		
社会教育課長	秋吉正一		
文化財担当係長	舟山良一		
主 査	徳本洋一	石木秀啓	
主任技師	丸尾博恵	林 潤也	
主任主事	大道和貴		
嘱 託	平島義孝	岸見泰宏	島田 拓（～6月） 上田 恵（～4月）
	西堂将夫	一瀬 智（10月～）	

平成 19 年度（第 3 次調査）

大野城市教育委員会

教育長 古賀宮太
教育部長 小嶋 健
ふるさと文化財課長 舟山良一
文化財担当係長 中山 宏
主 査 徳本洋一 石木秀啓 丸尾博恵
主任技師 林 潤也 早瀬 賢
技 師 上田龍児
嘱 託 井上愛子 城門義廣（～8月） 田尻義了（～6月） 遠藤 茜
石川 健（7月～） 大里弥生（10月～） 能塚由紀

令和 3 年度（報告書作成）

大野城市教育委員会

教育長 吉富 修（～6月） 伊藤啓二（6月～）
教育部長 日野和弘
ふるさと文化財課長 石木秀啓
啓発整備担当係長 林 潤也
主 査 徳本洋一
主任主事 秋穂敏明
主 事 鮫島由佳
会計年度任用職員（啓発） 山村智子 深町美佳
会計年度任用職員（事務） 三好りさ 光原乃里子（～9月） 荒巻美佐子（10月）
野上知則（11月～）
発掘調査担当係長 上田龍児
主任技師 山元瞭平
技 師 齋藤明日香
会計年度任用職員（調査） 澤田康夫 石川 健（12月～）
会計年度任用職員（整理作業） 白井典子 仲村美幸 小嶋のり子 松本友里江
津田りえ 氷室 優 古賀栄子 篠田千恵子
小畑貴子
会計年度任用職員（事務補助） 山上敬子 井之口彩子

【文献】

大野城市教育委員会 2003『松葉園遺跡 I』大野城市文化財調査報告書第 59 集

Ⅱ．位置と環境

松葉園遺跡は古くからの集落である乙金山の中に含まれる。周辺はすでに宅地化されており本来の地形は不明であるが、明治時代発行の地形図によると乙金山から西に派生する低丘陵がさらに西側へ舌状にのびたところに位置すると考えられる。

旧石器時代は乙金山・四王寺山から派生する丘陵上に本遺跡を含め薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡などがあり、市南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡でナイフ形石器や細石刃が確認されている。

縄文時代草創期の遺跡は市内では確認されていないが、周辺地域では春日市門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期には薬師の森遺跡や釜蓋原遺跡などで押型文土器が出土するほか、市南部の丘陵や平野微高地上にも遺跡が分布する。後期から晩期には原口遺跡をはじめ乙金山麓の丘陵地上の遺跡で遺物が確認され、牛頸山からのびる丘陵上の遺跡でも住居跡などが調査されている。

弥生時代前期には薬師の森遺跡などで集落跡がみられ、御陵前ノ椽遺跡や塚口遺跡、中・寺尾遺跡で甕棺墓・土坑墓・木棺墓が調査されている。御陵遺跡では前期中頃から末の集落が営まれ、前期末頃にはヒケシマ遺跡や仲島遺跡、平野部の石勺遺跡など集落が増加する。これらの遺跡は中期にも継続して営まれるが、中・寺尾遺跡、森園遺跡など丘陵地上でも集落が形成される。中・寺尾遺跡や森園遺跡では中期後半を主とする甕棺墓も調査されており、石勺遺跡や瑞穂遺跡でも甕棺墓を主とする墓地が形成される。後期には中・寺尾遺跡、森園遺跡や松葉園遺跡、平野部の仲島遺跡や石勺遺跡で集落が営まれるほか、榎町遺跡や村下遺跡など新たな集落も認められる。

古墳時代には福岡平野や那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。市域では明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群で小円墳群が確認されており、集落跡は森園遺跡に加え仲島遺跡や石勺遺跡で確認される。中期・5世紀前半に笹原古墳が築造された後、5世紀後半に古野古墳群などで群集墳の形成が始まる。集落は中・寺尾遺跡、森園遺跡や仲島遺跡、石勺遺跡などで確認される。後期は周辺地域で6世紀中頃まで前方後円墳がみられるが、6世紀後半以降は群集墳が急増する。市域でも月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓に位置する善一田古墳群、王城山古墳群などが築造される。集落は薬師の森遺跡のほか仲島遺跡等で確認されている。6世紀中頃以降牛頸窯跡群で須恵器生産が行われるが、乙金山・四王寺山麓の乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡でも牛頸窯跡群と近接した時期に須恵器生産が始まり、薬師の森遺跡では鉄器や須恵器生産に関わる集落が形成される。その後7世紀中頃から後半にかけて市域全体で遺構や遺物の減少がみられる。

奈良時代になると大宰府を中心として各地に官衙が設置され、官道も整備される。このような中薬師の森遺跡では集落が再び営まれるようになり、鍛冶炉に加え須恵器窯に関連する遺構もみられる。平安時代には中・寺尾遺跡、薬師の森遺跡、塚口遺跡、森園遺跡や松葉園遺跡で土坑墓や掘立柱建物が確認されている。集落も松葉園遺跡に加え御笠の森遺跡や上園遺跡などで確認されている。

鎌倉時代には薬師の森遺跡で12世紀後半から14世紀にかけての大規模な集落が確認され中世墓も多数検出されている。近世以降は薬師の森遺跡、原口遺跡や古野遺跡で近世から近現代にかけての墓地が造られている。



福岡市

- 1. 持田ヶ浦古墳群 A 群
- 2. 持田ヶ浦古墳群 B 群
- 3. 持田ヶ浦古墳群 C 群
- 4. 持田ヶ浦古墳群 D 群
- 5. 持田ヶ浦古墳群 E 群
- 6. 持田ヶ浦古墳群 F 群
- 7. 今里不動古墳
- 8. 堤ヶ浦古墳群
- 9. 影ヶ浦遺跡
- 10. 金隈遺跡群
- 11. 井相田 B 遺跡
- 12. 井相田 D 遺跡群
- 13. 井相田 C 遺跡群
- 14. 麦野 A 遺跡
- 15. 麦野 C 遺跡
- 16. 南八幡遺跡群
- 17. 雑餉隈遺跡群

大野城市

- 18. 唐山古墳群

19. 乙金北古墳群

- 20. 唐山遺跡
- 21. 御陵古墳群
- 22. 御陵脇遺跡
- 23. 塚口遺跡
- 24. 御陵前ノ椽遺跡
- 25. 善一田遺跡・古墳群
- 26. 王城山遺跡・古墳群
- 27. 古野遺跡・古墳群
- 28. 原口遺跡・古墳群
- 29. 乙金窯跡群
- 30. 此岡古墳群
- 31. 松葉園遺跡
- 32. 森園遺跡
- 33. ヒケシマ遺跡
- 34. 中ノ寺尾遺跡
- 35. 花園遺跡
- 36. 薬師の森遺跡
- 37. 銀山遺跡
- 38. 原門遺跡

39. 雉子ヶ尾遺跡

- 40. 雉子ヶ尾窯跡
- 41. 雉子ヶ尾古墳
- 42. 釜蓋原古墳群
- 43. 笹原古墳
- 44. 金山遺跡
- 45. 釜蓋原遺跡
- 46. 仲島遺跡
- 47. 仲島本間尺遺跡
- 48. 川原遺跡
- 49. 御笠の森遺跡
- 50. 村下遺跡
- 51. 宝松遺跡
- 52. 雑餉隈遺跡
- 53. 石勺遺跡
- 54. 原ノ畑遺跡
- 55. 後原遺跡
- 56. 御供田遺跡
- 57. 瑞穂遺跡
- 58. 国分田遺跡

59. 古賀遺跡

太宰府市

- 60. 成屋形遺跡群
- 61. 成屋形古墳群
- 62. 裏ノ田窯跡
- 63. 裏ノ田古墳
- 64. 裏ノ田遺跡
- 65. 駿河 A 遺跡
- 66. 駿河 B 遺跡
- 67. 駿河 D 遺跡
- 68. 駿河 E 遺跡
- 69. 原ノ口遺跡
- 70. 先ノ原遺跡
- 71. 立石遺跡
- 72. 先ノ原春日公園内遺跡

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 第2次調査の成果

1. 調査概要

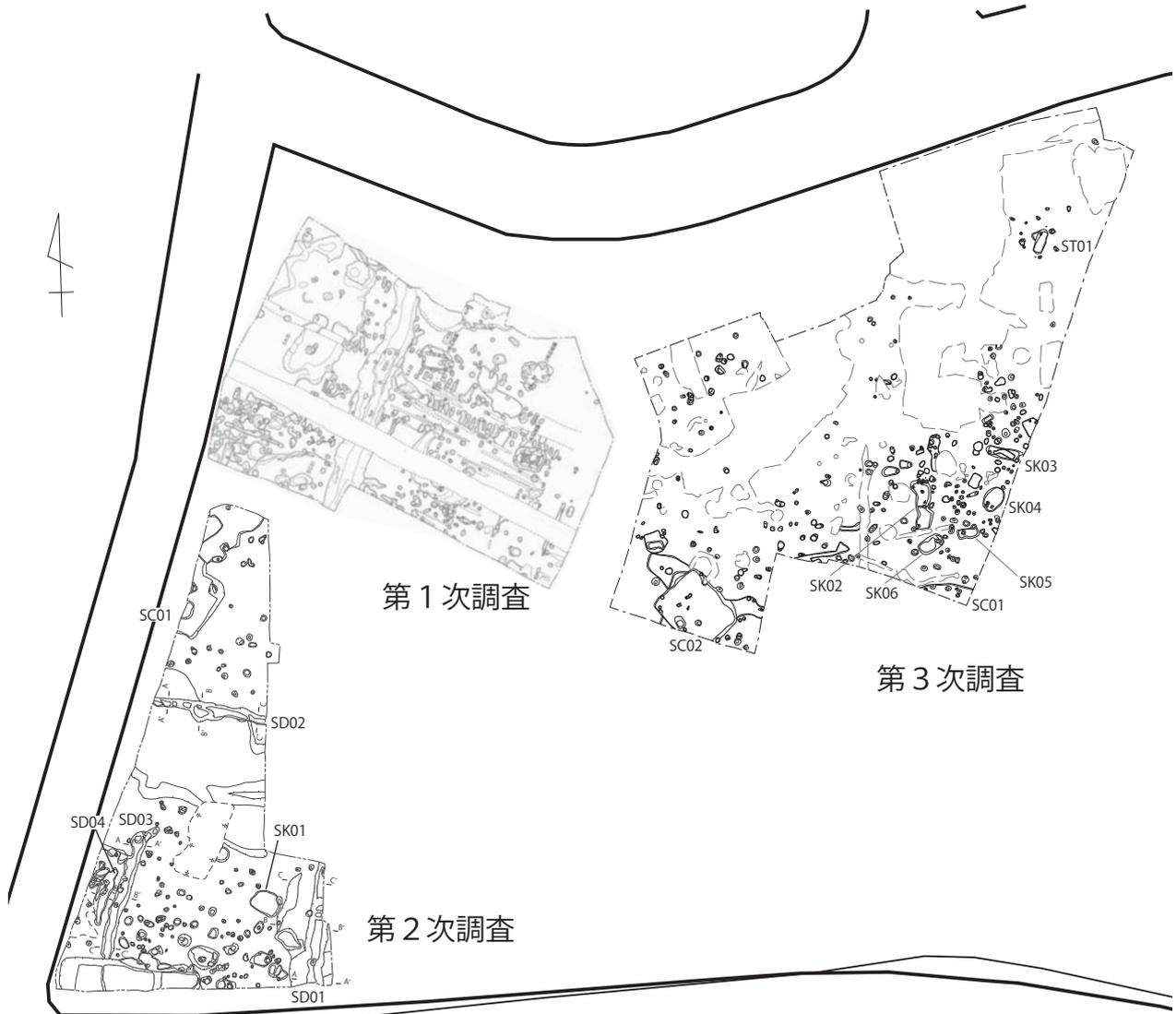
松葉園遺跡第2次調査地点は、大野城市乙金1丁目781-1に所在し、調査面積は240㎡を測る。遺構面の標高は23.6～24.0 m。現在はほぼ平坦化しているが、古い地図などを見ると、本来は乙金山から派生する低丘陵上に位置することがわかる。花崗岩バイラン土（黄褐色土）が遺構面を形成する。

調査の結果、弥生時代の土坑、古墳時代の竪穴建物跡・溝跡、平安時代の溝跡などが検出され、弥生土器や土師器・須恵器、白磁などの遺物がパンコンテナ4箱分出土した。

なお、本調査区は第1および3次調査とは隣接する（第2・3図）。



第2図 松葉園遺跡第2・3次調査区位置図 (1/2,500)



第3図 松葉園遺跡第1～3次調査区位置図 (1/400)

2. 遺構と遺物

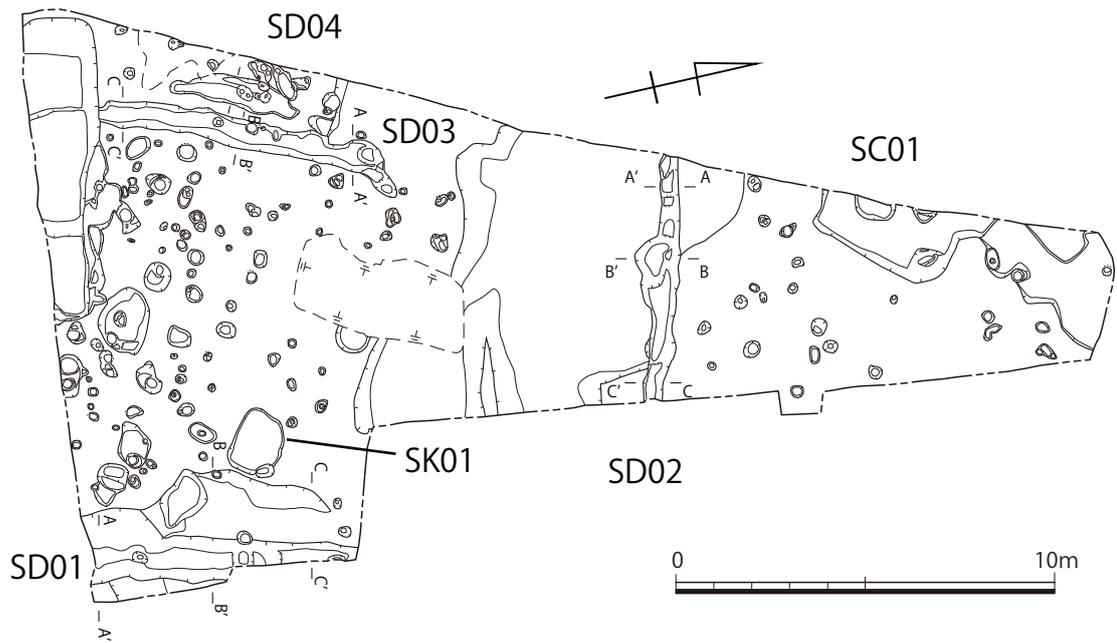
(1) 竪穴建物跡

SC01 (第5図、図版2)

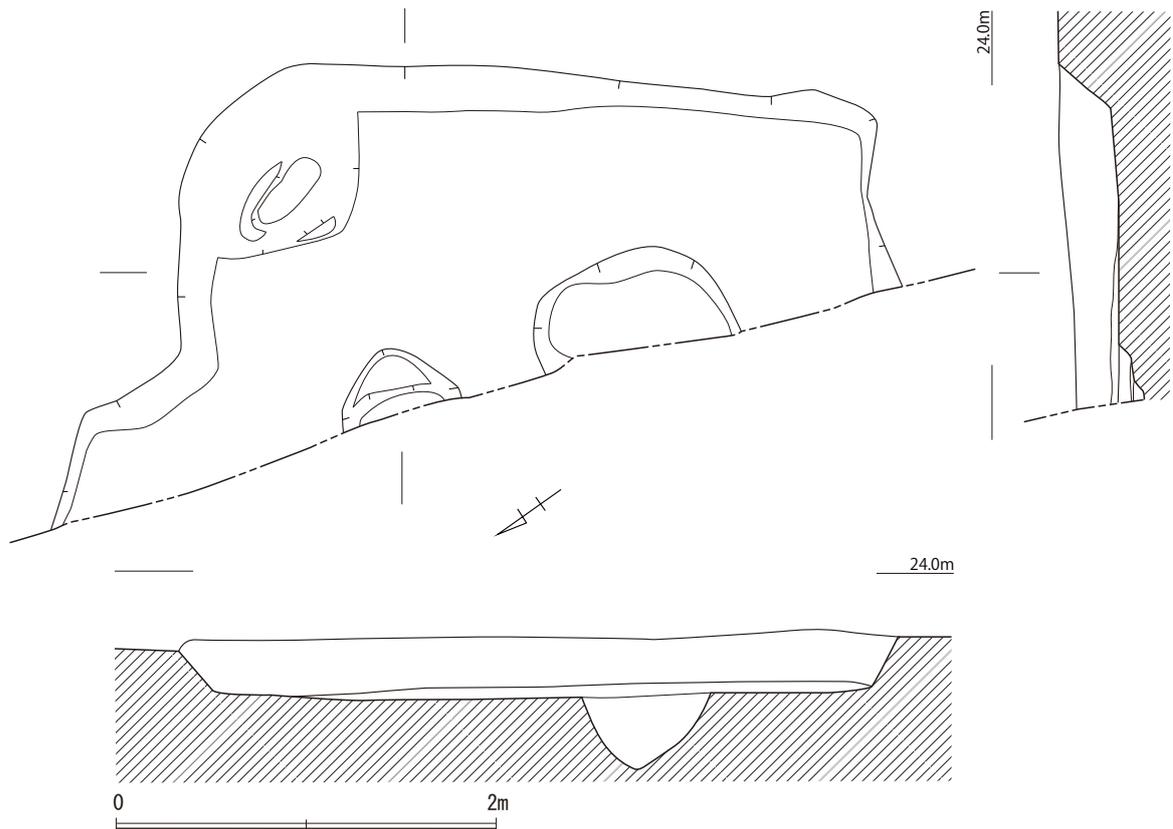
調査区の北端部付近で検出された。竪穴西半部は調査区外のため未調査である。東壁は略南西—北東方向で、本竪穴のうち唯一壁面の全長が確認されており 3.3 m を測る。また、南壁は略南東—北西方向で、0.9 m が確認されている。これらおよびやや不整形であるが北壁などから本来は 3.5×3.5 m ほどの正方形の竪穴であったものと推測できる。遺構の深さは検出面から最深部で約 34cm が残存する。カマドや炉などは検出されていない。床面はほぼ水平である。出土遺物としては、図示した土師器・縄文土器・弥生土器・土製品のほか、黒曜石・サヌカイト片、混入と考えられる白磁小片などが出土している。

出土遺物 (第6図、図版4)

土師器 (1～3) 1・2は高杯。杯部には明瞭な稜を有し、脚部は脚柱部から強く屈曲して裾部

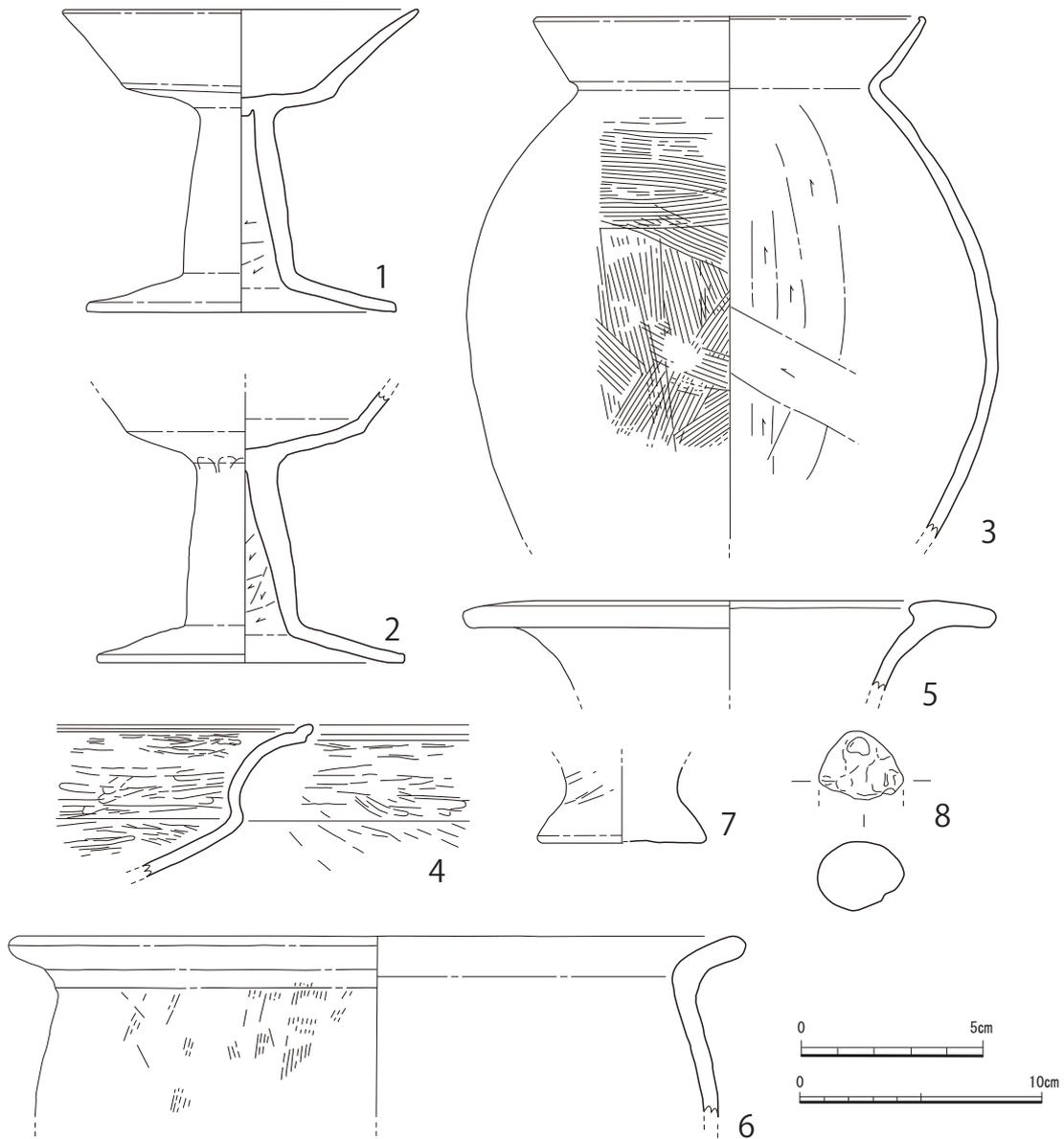


第4図 第2次調査区遺構配置図 (1/200)



第5図 第2次調査 SC01実測図 (1/40)

にいたる。内外面ともナデ調整を施す。3は甕。口縁部は直線的で先端部は僅かに内側に向け肥厚する。胴部最大径はやや上位にあるが肩は張らない。胴部外面はハケメ（上位は横方向）、内面はケズリ調整を施す。



第6図 第2次調査 SC01出土遺物実測図 (1/3、8 : 1/2)

縄文土器 (4) 4は浅鉢。口縁部に沈線を一条めぐらす。内外面ともミガキ調整を施す。

弥生土器 (5~7) 5は広口壺。鋤先口縁を有し、内外面とも丹塗りを施す。6・7は甕。6の口縁部はやや緩慢に屈曲する。7は厚底で裾部が踏ん張る。

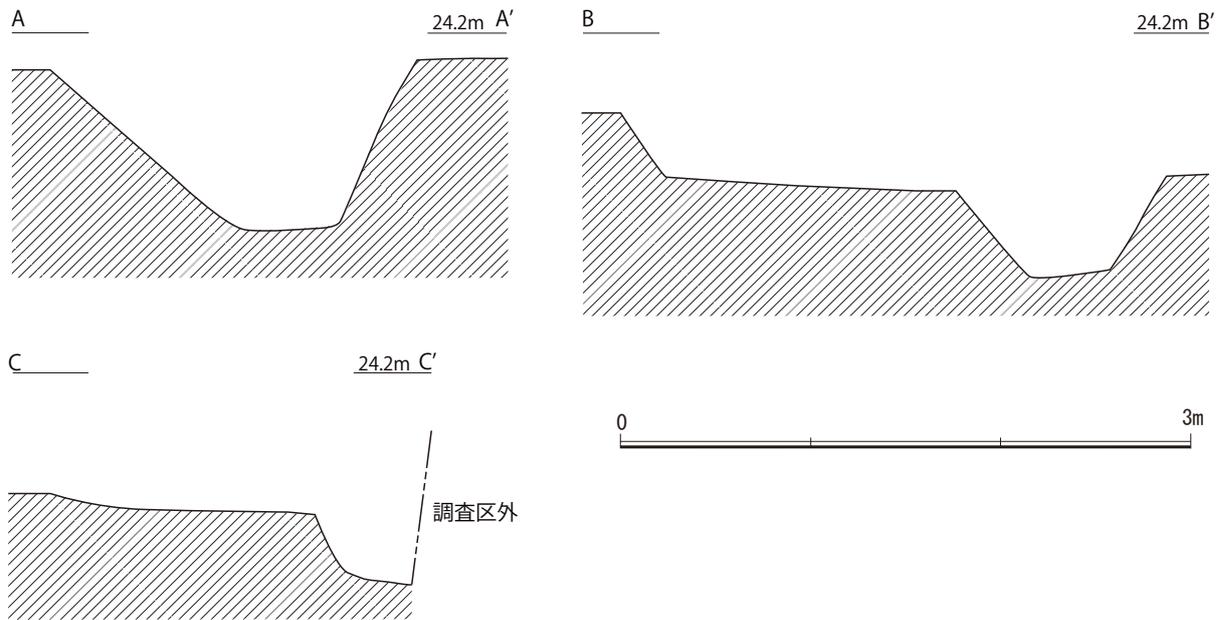
土製品 (8) 8は投弾。弥生土器に比べ胎土は精良である。

(2) 溝状遺構

調査区内で溝状遺構が4条検出された。そのうちSD01、SD03、SD04は調査区南半部で検出されている。

SD01 (第4図・第7図、図版2)

調査区南東部に位置し、一部調査区壁面にかかりながら略南北方向に検出されている。溝自体は



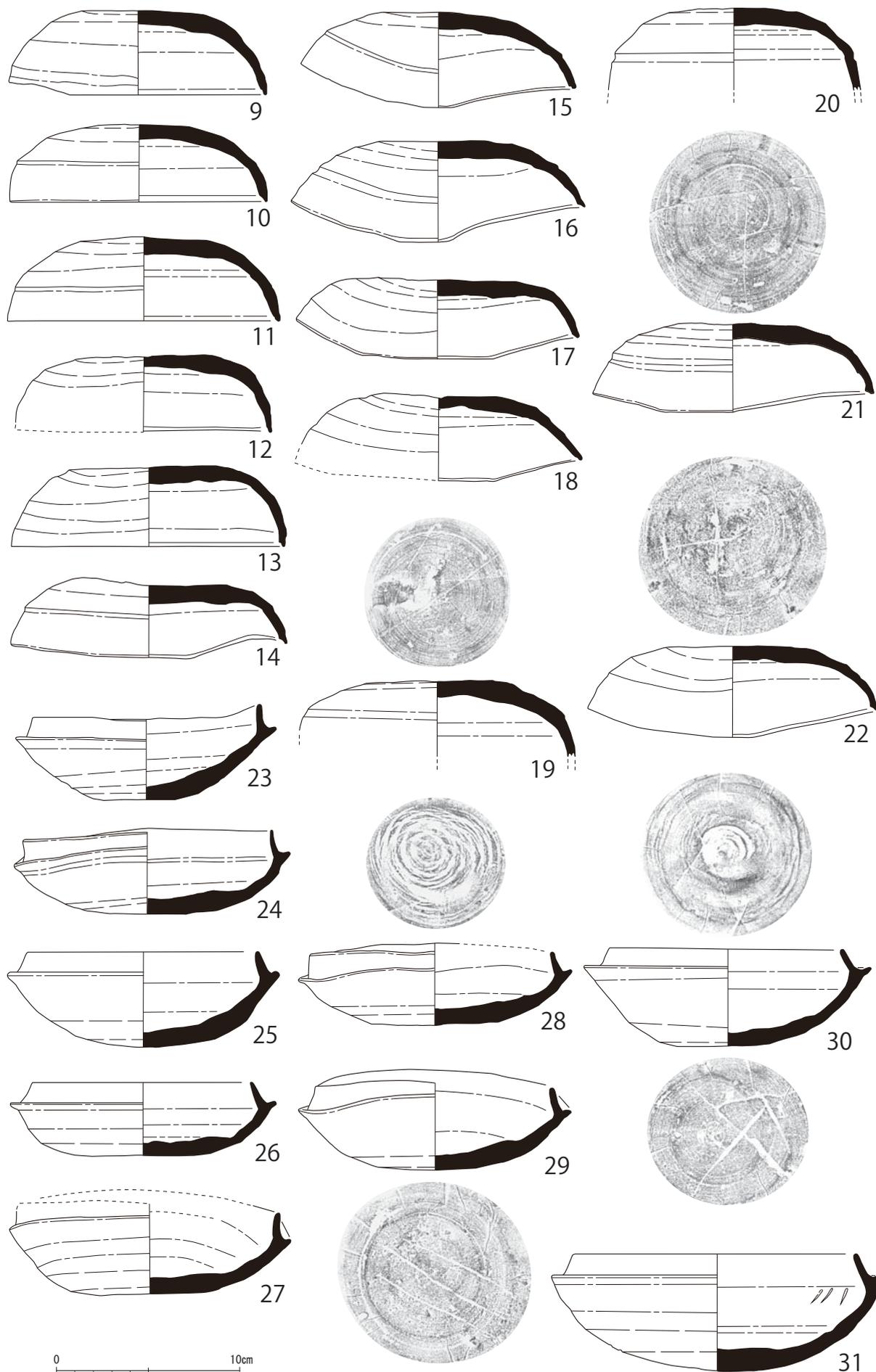
第7図 第2次調査 SD01断面実測図 (1/40)

調査区外に延びる。検出されている範囲では全長 7.3 m、上端は最大幅 2.86 m である。最深部で遺構検出面から 90cm 残存する。溝底面のレベルは、検出された範囲の中央部でいったん低くなるものの、南北両端で大きな高低差はみられない。出土遺物としては、図示した須恵器・土師器・土製品のほかに、弥生土器小片や黒曜石剥片などが出土している。

出土遺物 (第8～12図、図版4～8)

須恵器 (9～32) 9～22は杯蓋。いずれも口縁部内面に段を有し、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。10・11・14～16・19・20・22は天井部と体部の境に微かな段や沈線を巡らす。ヘラ記号を有するものは3点あり、19は「V」状、21・22は「X」状を呈する。いずれも天井部外面に施す。11・13には外面に火櫓が観察できる。9・12・15・16・18・21・22は外面に降灰が確認できる。総じて歪みがあり、特に14～18・21・22は正置することが困難なほど歪んでいる。口径は計測可能な資料から判断する限り、15.0～16.0cmが中心となる。23～31は杯身。口縁部は直立気味に立ち上がり、その長さは概ね1.0cmを超える。口縁部内面に段はない。いずれも外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整であるが、内面に同心円当具痕が残る資料(28・30)もある。ヘラ記号を有するものは2点あり、29は「三」状、30は「一」状を呈する。両資料とも底部外面に施す。31は受部径18.0cmを測る大型品であるが、他の資料と比べて焼成が不良である。29は外面に降灰が確認できる。23・24・27～29は歪みが著しく、先述した杯蓋と同様の特徴である。口径は計測可能な資料から判断する限り、13.0～14.0cmが中心となる。32は高杯蓋。口縁部内面には明瞭な段を有し、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。つまみ径は3.7cmを測り、中央がやや窪む。天井部に別個体の須恵器(杯身か?)が溶着している。つまみを有することから高杯蓋に分類したが、31のような大型の杯身とセットになる可能性もある。

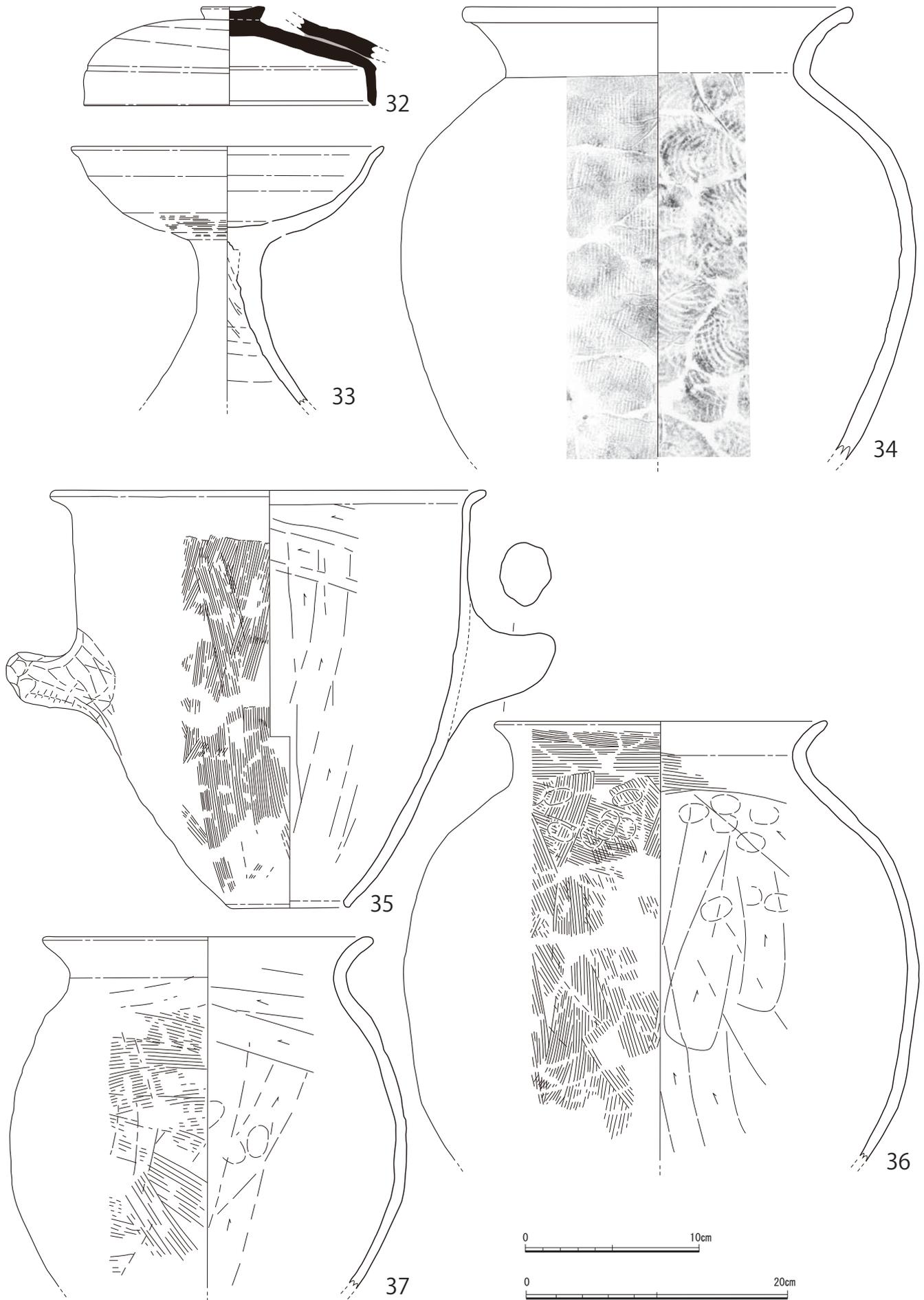
土師器 (33～38) 33は高杯。杯部下半に回転ヘラ削り痕とカキメが確認できる。杯部と脚部は



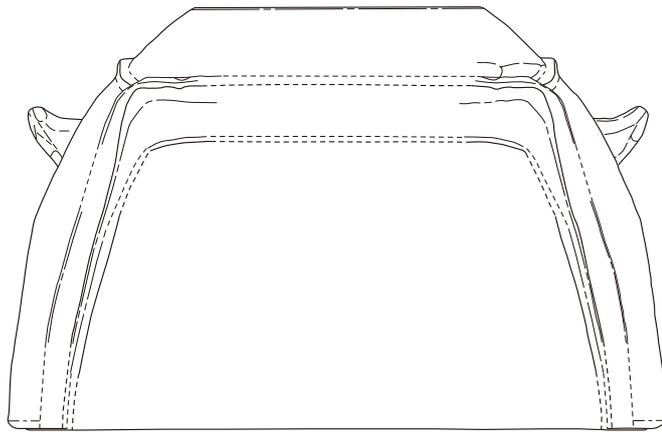
第8図 第2次調査 SD01出土遺物実測図(1) (1/3)

接合しないが、胎土や色調から同一個体と判断し、図化した。34は甕。胴部外面には擬格子タタキ、内面には同心円文当て具痕が明瞭に観察できる。底部付近を欠いているが、接合できなかった同一個体と考えられる小片も多く出土している。35は甗。底部は単孔。外面に縦方向のハケメ、内面に縦方向のケズリを施す。黒斑を有する。明瞭な被熱の痕跡は確認できない。36・37は甕。いずれも外面にハケメ、内面にケズリを施す。36は胴部が張る形態であり、器壁は薄く堅緻に焼成されている。胴部の焼け歪みが顕著である。胴部外面が広く黒化しており、被熱痕の可能性が高い。37は36に比べ、胎土も調整も粗い。胴部下半は、器面が赤化・劣化した部分があり、被熱痕の可能性が高い。38は移動式カマド。天井部はドーム状を呈し、焚口上部には幅狭の付け庇、焚口側面には突帯状の小さな付け庇を有する。口縁端部は丸みを持ち、口縁部からやや下がった位置には、焚口上部の庇に連続するように突帯を巡らす。裾部は内面に突出し、底面はわずかな段を生じていることから、成形台の痕跡であろう。内傾接合により粘土帯を積み上げ後、タタキを施す。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕が残り、当て具は上部が下部を切る。したがって、正置技法により下部から上部にかけて粘土帯を積み上げながら成形していったことが分かる。煤の付着など明瞭な使用痕は観察できない。

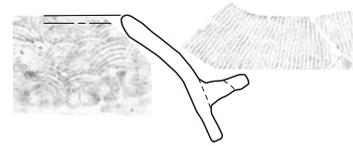
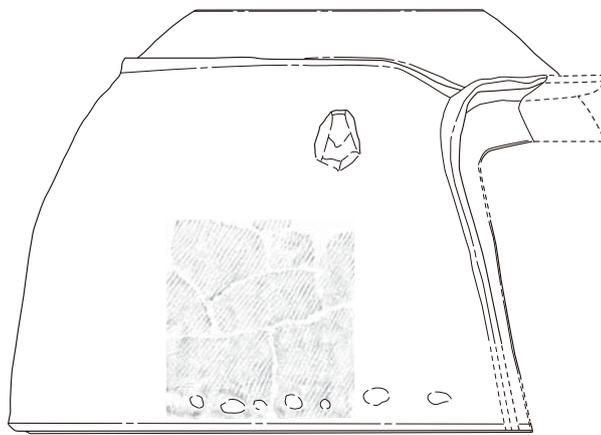
土製品 (39・40) 39は長さ44cm、幅13～14cm、厚さ3～4cmの板状土製品である。平面長方形を呈し、図面上側が厚く下側に向かって薄くなる。表裏面は平坦で、一方の面はハケメ調整後、かなり乾燥が進行した段階でケズリ状の調整や工具ナデにより平滑に仕上げている(以下、表面)。表面には最終調整後に先端が尖った工具で線刻をしており、短軸方向の明瞭な3本の直線と長軸方向の不明瞭な半月形の線を確認することができる。また、表面中央部を中心に橙色の付着物(一部黒色の付着物)が残る。もう一方の面は調整が粗くハケ・ケズリ・擦痕や接合痕が明瞭に残る(以下、裏面)。長軸方向の両側縁部は平坦で、図面上側の側縁は直線的であるのに対し、図面下側の側縁部はわずかに湾曲する。調整の精粗・側縁部の直線の程度や線刻の存在から、表裏面と上下を意識して作られた可能性がある。短軸方向の図面左側縁は短いピッチのケズリ、右側縁はハケ・ナデである。接合の痕跡から棒状・塊状の粘土を貼り足しながら成形したことがうかがえ、短軸方向の破断面観察によれば、図面下側に向かって凸状の接合痕を確認できることから、上から下に向かって粘土を貼り付けていったと考えられる。40は長さ49.5cm以上、幅17.4～19.3cm、厚さ2.0～2.4cmの板状土製品である。平面長方形を呈し、図面上側がわずかに厚く下側に向かって薄くなる。表裏面は平坦で、一方の面はハケメ調整・指オサエ後、長軸方向のナデで、側縁部付近は乾燥が進行した段階でケズリ状の調整や工具ナデにより平滑に仕上げている(以下、表面)。また、一部にミガキを施す。表面には最終調整後に先端が尖った工具で線刻をしており、短軸方向の明瞭な3本の直線を確認することができる。もう一方の面は表面と同様の調整であるが、全体的に粗い(以下、裏面)。裏面には竹管状(直径0.6～0.7mm)の押圧痕がある。長軸方向の両側縁部は平坦かつ直線的で、図面左下のみ角を消すように仕上げている。調整の精粗や線刻の存在から、表裏面と上下を意識して作られた可能性がある。短軸方向の図面左側縁はケズリを施し平滑となる。接合の痕跡から棒状・塊状の粘土を貼り足しながら成形したことがうかがえる。また、表裏面および長軸方向の側縁部に黄色・赤色の付着物が残る。



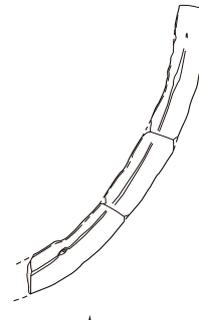
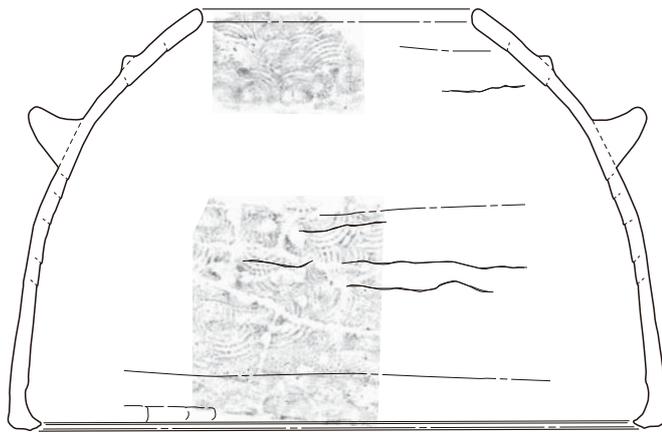
第9図 第2次調査 SD01出土遺物実測図(2) (1/4、32・33:1/3)



|



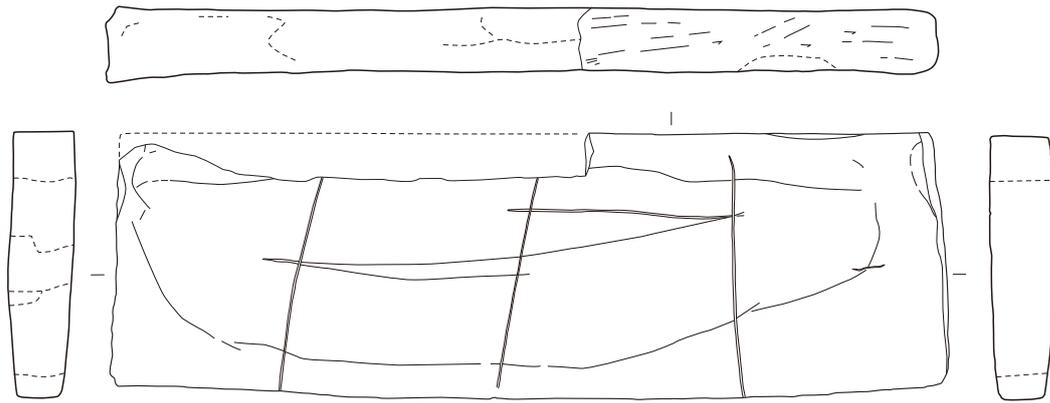
|



38



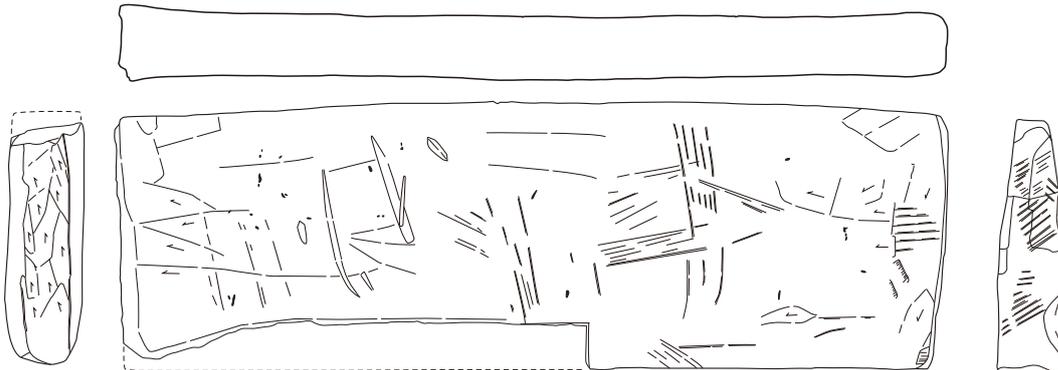
第10図 第2次調査 SD01出土遺物実測図(3) (1/6)



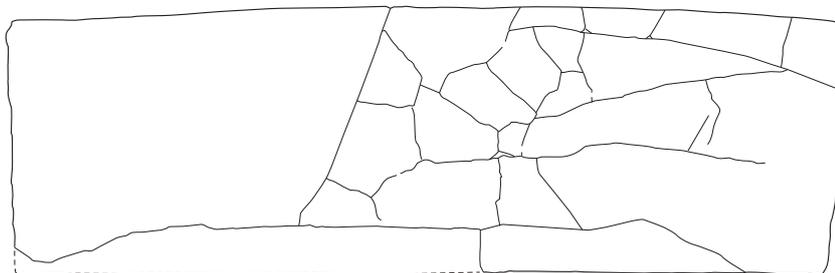
表面（線刻）



表面（線刻+調整）



裏面（調整）

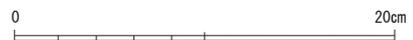


裏面（接合痕）

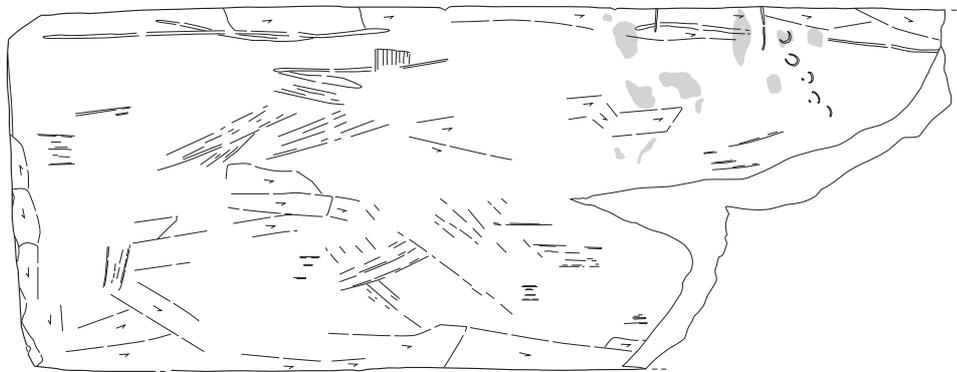
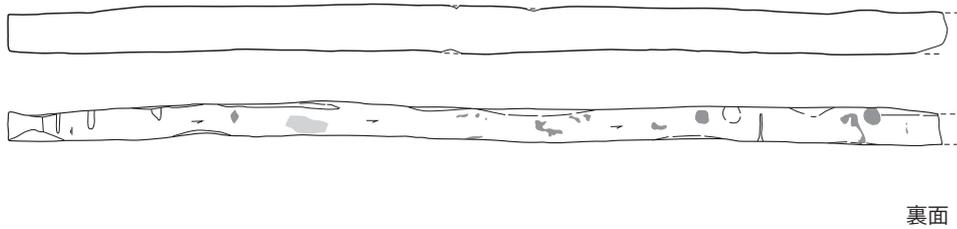
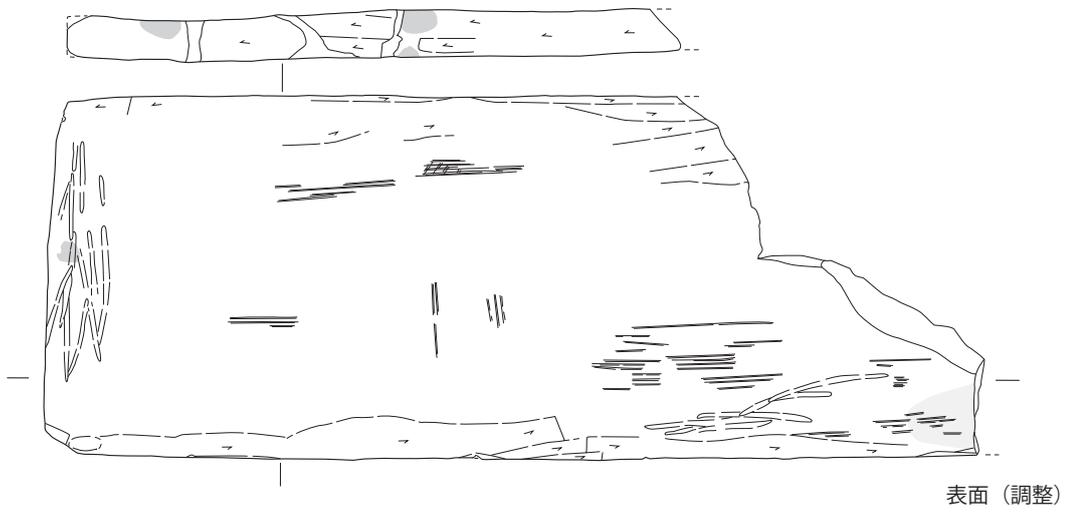
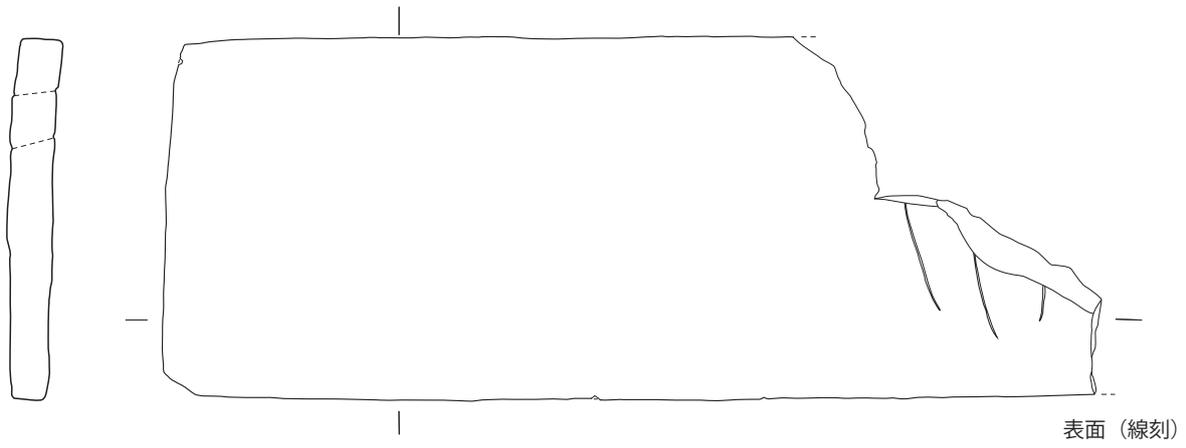
- ：黒斑
- ：黄色付着物
- ：赤色付着物
- ：黒色付着物



39



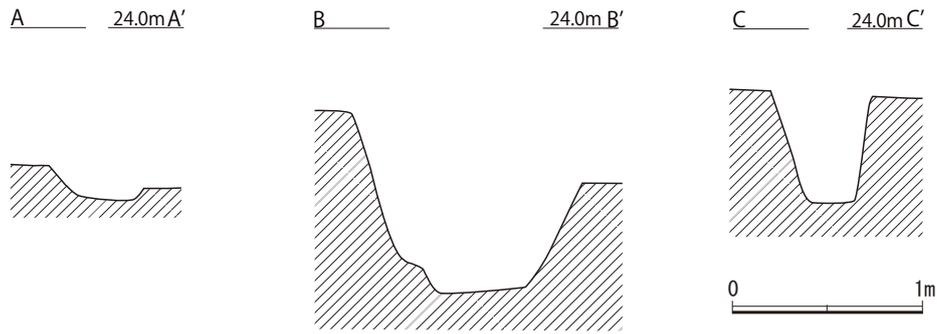
第11図 第2次調査 SD01出土遺物実測図（4）（1/4）



40



第12図 第2次調査 SD01出土遺物実測図（5）（1/4）



第13図 第2次調査 SD02断面実測図 (1/40)

SD02 (第4図・第13図、図版2)

調査区中央やや北よりで検出された。SD01 や後述の SD04、SD03 とは異なり、略東西方向に流れる溝である。検出された範囲のほぼ中央部分が土坑状の落ち込みによりやや拡幅したような形状を呈する。調査区外東西方向に延びる。全長 6.4 m、上端の最大幅 0.66 m、最深部で遺構検出面から 60cm 残存する。溝底面のレベルは調査区内の東西両端で大きな高低差はみられない。出土遺物としては、図示した土師器・須恵器・瓦器・白磁のほかに、青磁小片などが出土している。

出土遺物 (第14図、図版9)

土師器 (41～46) 41～44 は杯。いずれも底部ヘラ切り。板状圧痕が観察できる。口径は 15.0cm～16.0cm。45・46 は鍋。45 は外面に煤が付着し、口縁部内面直下には黒色の付着物が帯状に確認できる。内底面は器面が劣化しており、これも使用痕の可能性はある。内外面ナデ調整であるが、体部外面に粘土の溜まりが帯状に連っており、ヘラ状工具を使用した痕跡なのかもしれない。

須恵器 (47) 47 は鉢。口縁部外面には、沈線状の段が巡る。東播系。

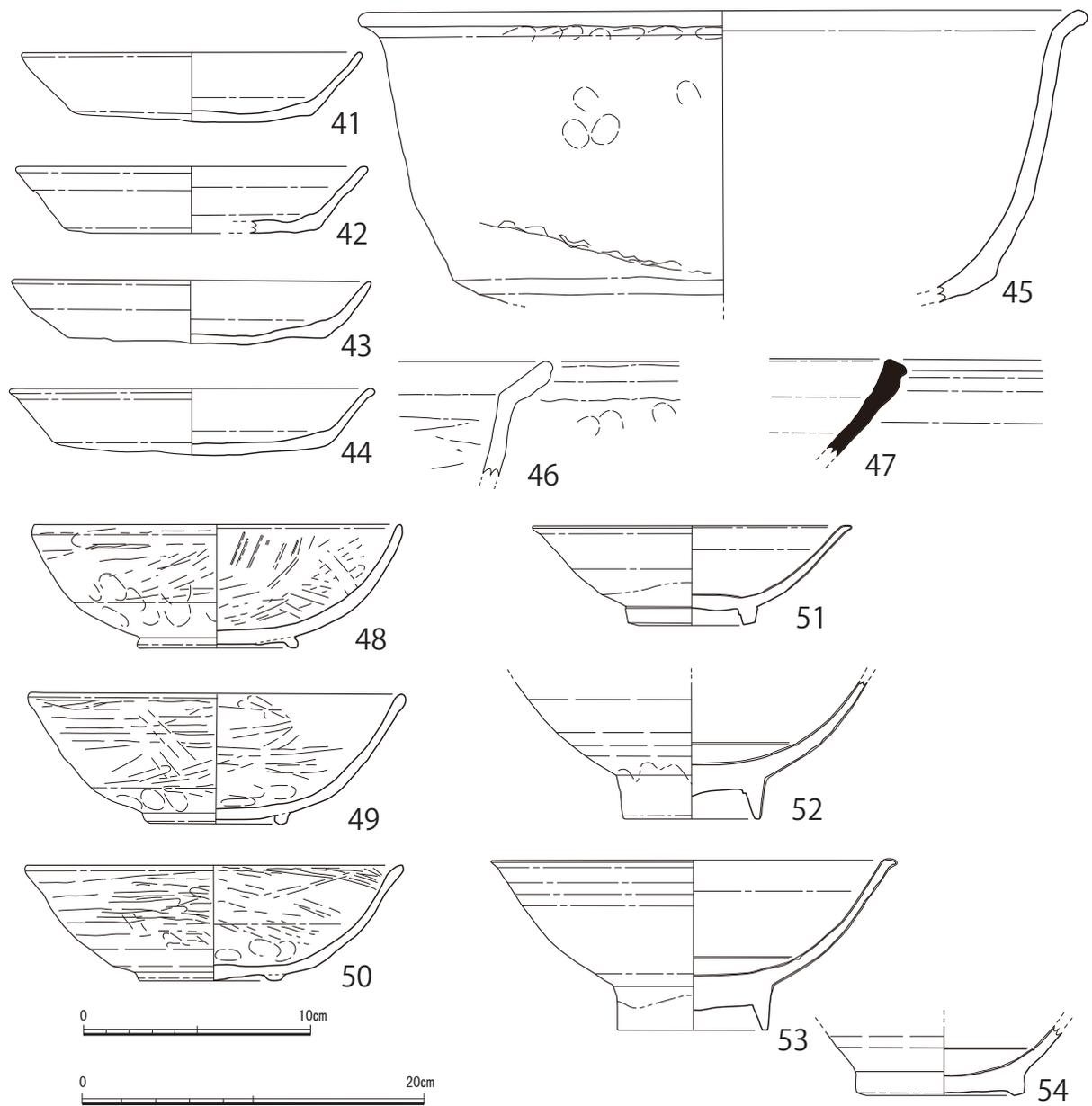
瓦器 (48～50) いずれも椀。48 は外面に指頭痕が明瞭に残り、内面にはコテ当ての痕跡が観察できる。49 は内外面ともに比較的丁寧にミガキ調整を施す。50 は底部の押し出し痕が不明瞭であり、器面も燻されていない。

白磁 (51～54) いずれも椀。51 は内面見込みの釉を環状に掻き取り、口縁部は外側に屈折する。太宰府分類Ⅷ類。52・53 は細く高い高台を有する。53 の口縁部は外側に屈折する。太宰府分類Ⅴ類。54 は高台の削り出しが浅く、底部の器壁が厚い。内面は施釉されているが、残存部の外面には施釉が確認できない。太宰府分類Ⅳ類。

SD03 (第4図・第15図)

調査区南西部で略南北方向に検出されている。全長 8.2 m で南端部は落ち込みとの重複により消失しているが、残存部分の形状からはそれほど南へは続かないものと推測される。北端部は調査区中央付近で収束する。上端最大幅は 0.84 m、最深部で遺構検出面から 18cm 残存する。溝底面のレベルは南から北側に傾斜しており、高低差は約 30cm である。

小片のため図化に耐えないが、縄文土器片、弥生土器片や土師器片に加え、土師質火鉢片や青磁片が出土している。



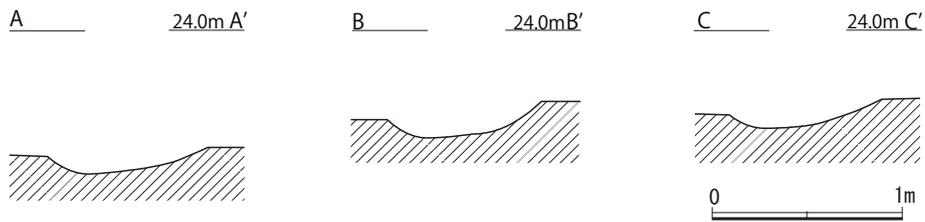
第14図 第2次調査 SD02出土遺物実測図 (1/3、45・46 : 1/4)

SD04 (第4図・第16図)

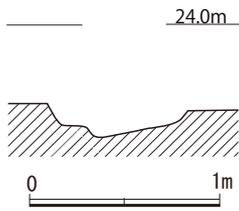
調査区南西隅付近、SD03の西側に位置している。北端部はやや北東方向に折れつつ収束する。南北長3.6m、上端の最大幅0.74mを測る。最深部で遺構検出面から19cm残存する。溝の上面および底面のレベルはともに南から北側に緩やかに傾斜しており、高低差は約5cmである。出土遺物としては、図示した瓦質土器のほかに縄文土器、弥生土器、土師器小片や黒曜石片が出土している。

出土遺物 (第17図)

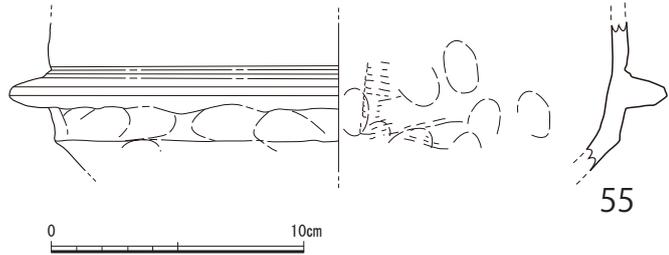
瓦質土器 (55) 55は湯釜。鏝の下面以下には煤が付着している。



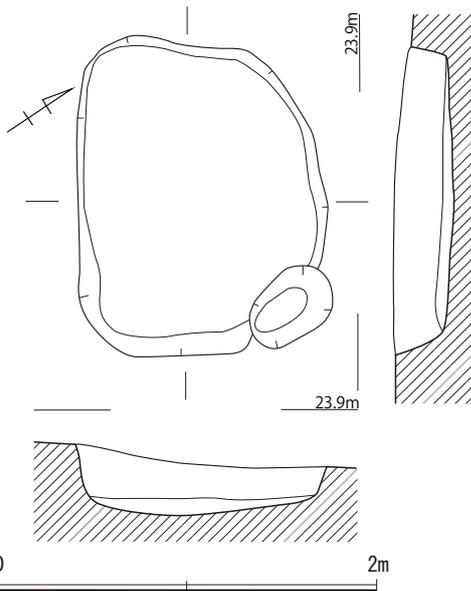
第15図 第2次調査 SD03断面実測図 (1/40)



第16図 第2次調査
SD04断面実測図 (1/40)



第17図 第2次調査 SD04出土遺物実測図 (1/3)



第18図 第2次調査 SK01実測図 (1/40)

(3) 土坑

SK01 (第18図、図版2)

調査区南半、SD01の西側に位置する。長軸が略北西—南東で1.64m、短軸で1.32m、北側のコーナー部分がやや隅丸ではあるが、長方形プランを呈する。最深部で38cmが残存する。床面は土坑中央部へ向かって緩やかに傾斜する。出土遺物としては、図示した弥生土器のほかに、黒曜石・サヌカイト片が出土している。

出土遺物 (第19図)

弥生土器 (56～58) 56～58は甕。56・57は口縁部が強く屈曲し、57は端部を摘み上げる。57は器面の磨耗が著しく調整は不明。

(4) ピット等出土遺物

ピットや遺構検出面からは、弥生土器を主体として、土師器片や須恵器片、瓦器片、黒曜石製石鏃、石庖丁片、粘土塊などが出土した。

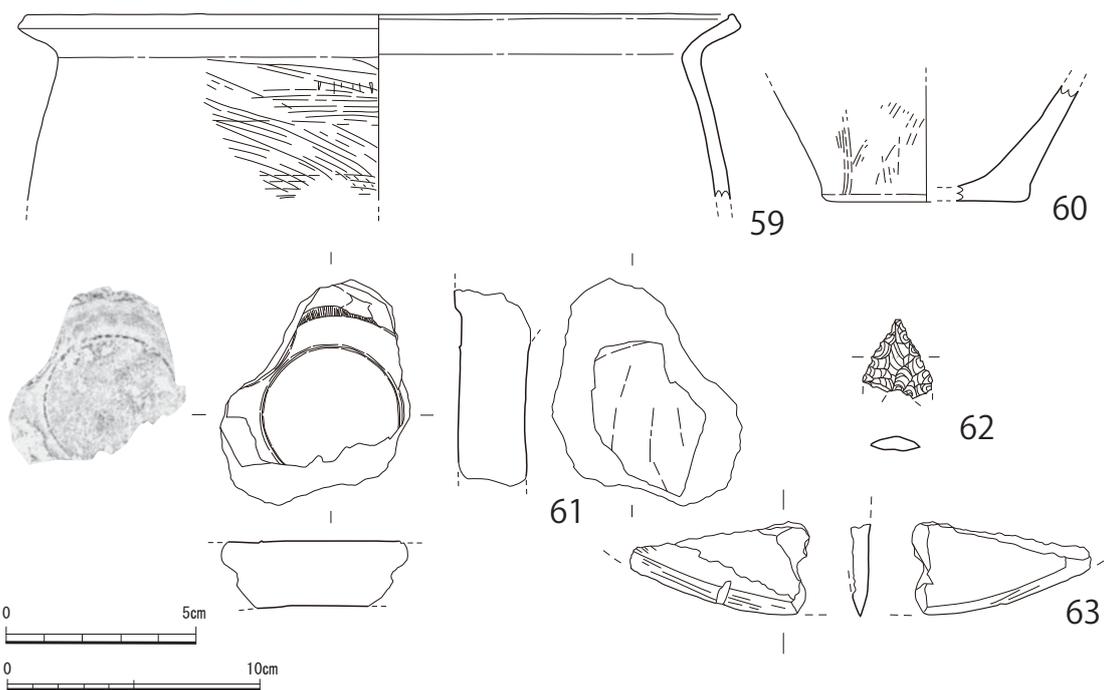
出土遺物 (第20図、図版9)

弥生土器 (59・60) 59・60は甕。59は口縁部が強く屈曲し、端部を摘み上げる。胴部外面には横位～斜位のハケメを施す。

土製品 (61) 61は不明製品。正面には直径5.5cmの微かな高まりがあり、その外縁はさらにや



第19図 第2次調査 SK01出土遺物実測図 (1/3)



第20図 第2次調査 ピット出土遺物実測図 (1/3、62・63 : 1/2)

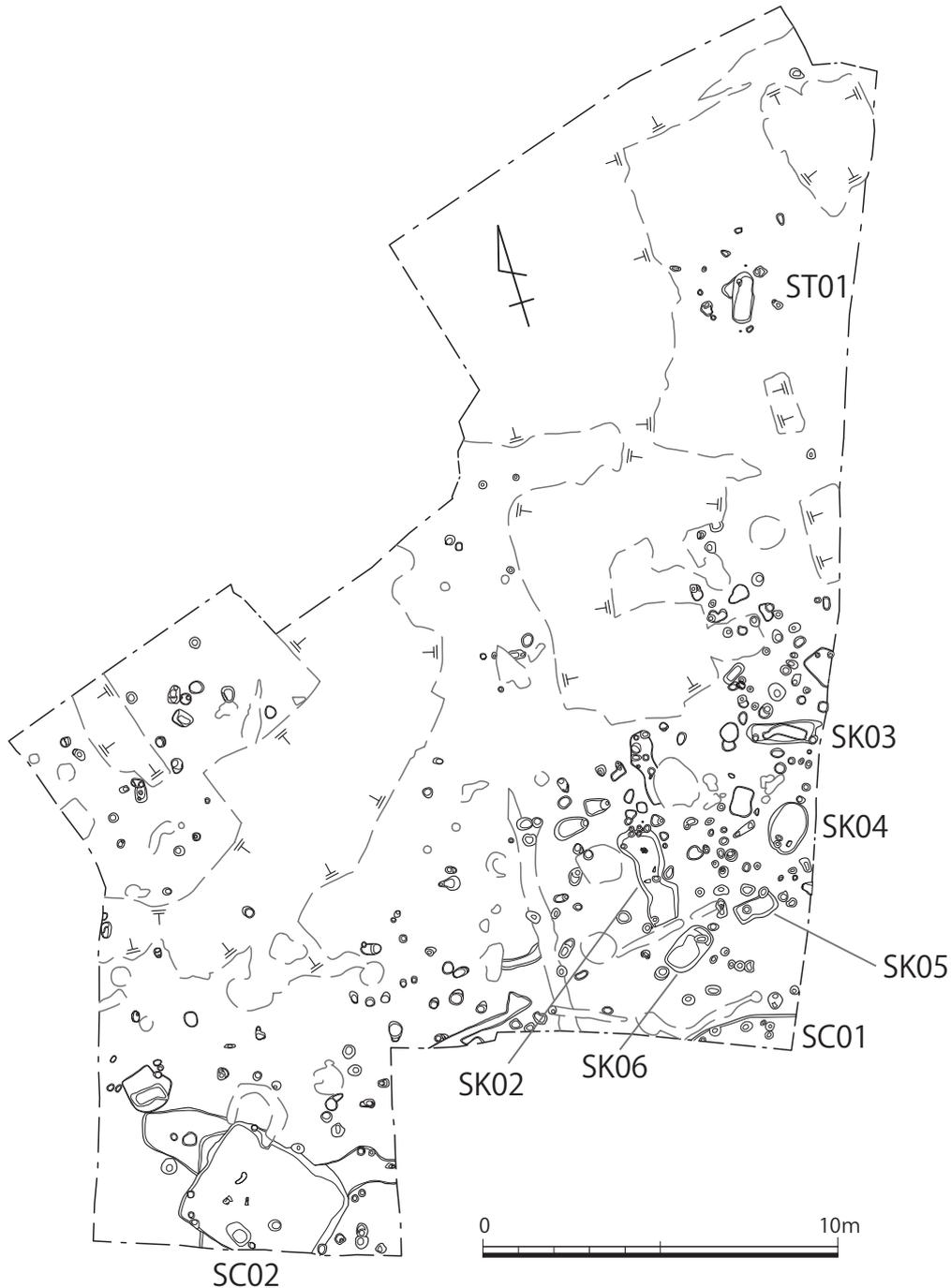
や高い。用途は不明であるが、軒丸瓦の無文の瓦当部の可能性がある。胎土は精良で土師質に焼成されている。

石製品 (62・63) 62は石鏃。両脚部を欠損するが、比較的丁寧なつくり。黒曜石製。63は石庖丁。小片であるため詳細は不明。頁岩製。

IV. 第3次調査の成果

1. 調査概要

松葉園遺跡第3次調査地点は、大野城市乙金1丁目784-1・2、785-2に所在し、調査面積は450㎡を測る。遺構面の標高は23.9～24.4m。南西側の遺構面は相対的に低くなる。現在はほぼ



第21図 第3次調査区遺構配置図 (1/200)

平坦化しているが、古い地図などを見ると、本来は乙金山から派生する低丘陵上に位置することがわかる。花崗岩バイラン土（黄褐色土）が遺構面を形成する。

調査の結果、弥生時代の竪穴建物や土坑、平安時代の土坑墓や土坑などが検出され、弥生土器や土師器、白磁や瓦器などの遺物がパンコンテナ 2 箱分出土した。遺構密度は南側で高く、北側で低い。また北側は大規模に攪乱を受けている。

2. 遺構と遺物

(1) 竪穴建物跡

SC01（第 22 図）

調査区の南東部で検出された。竪穴北端部がわずかに確認されたが、大部分は調査区外のため未調査である。北壁がわずかに調査されているのみであるため、竪穴の規模など不明であるが、遺構検出面から床面までの深さは 20cm である。

小片のため図化に耐えないが、弥生土器片が出土している。

SC02（第 22 図、図版 3）

調査区最南部の壁際で検出された。竪穴南隅は調査区外であるため調査されていないが、北壁は略北西—南東方向で 4.0 m、西壁が略北東—南西方向 3.0 m を測る。また、東壁および南壁もおおよそ半分ほどが検出されている。このような残存状況から本竪穴は長辺 4.0 m、短辺 3.0 m のやや北壁および南壁が長い長方形プランを呈するものと判断できる。遺構検出面から床面までは最大で深さ 30cm が残存する。炉などは検出されていない。出土遺物としては、図示した弥生土器のほか、石庖丁小片や黒曜石片が出土している。

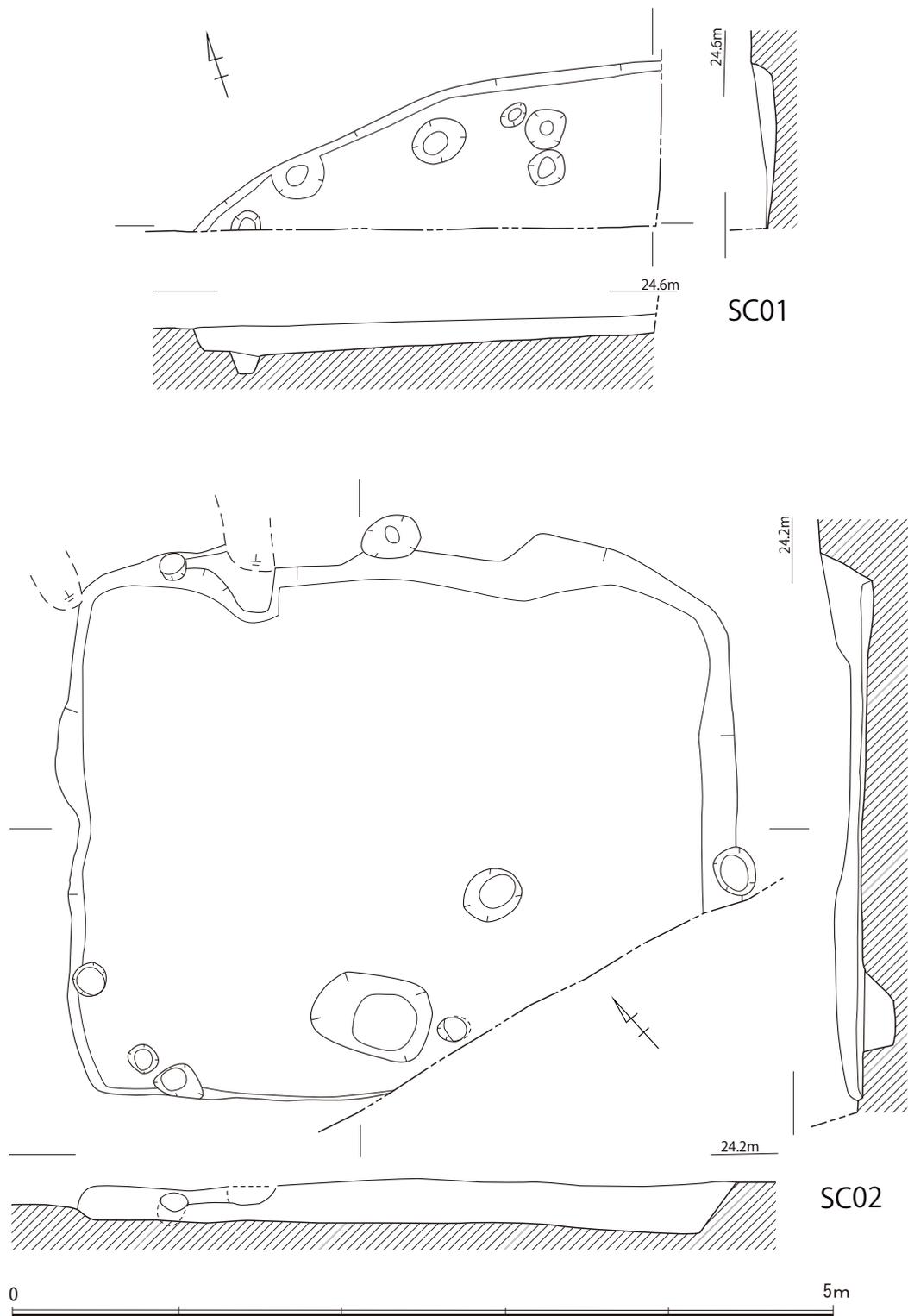
出土遺物（第 23 図、図版 9）

弥生土器（64～75） 64 は甕蓋。比較的低位に広がり、裾端部には明瞭な稜を持つ。外面および裾部内面にはハケメ調整を施し、外面に黒斑を有する。65～68 は甕。65 の口縁部は屈曲し、66 の口縁部は内面に小さく突出し鋤先状を呈する。69 は壺の底部片。70 は鉢。素口縁であり内外面ナデ調整を施す。71・72 は器台。71 は口縁部径と裾部径のサイズがほとんど変わらない。いずれも外面ハケメ、内面ナデ調整を施す。73～75 は支脚。いずれも器壁が極めて厚く、外面には指頭圧痕が顕著に確認できる。

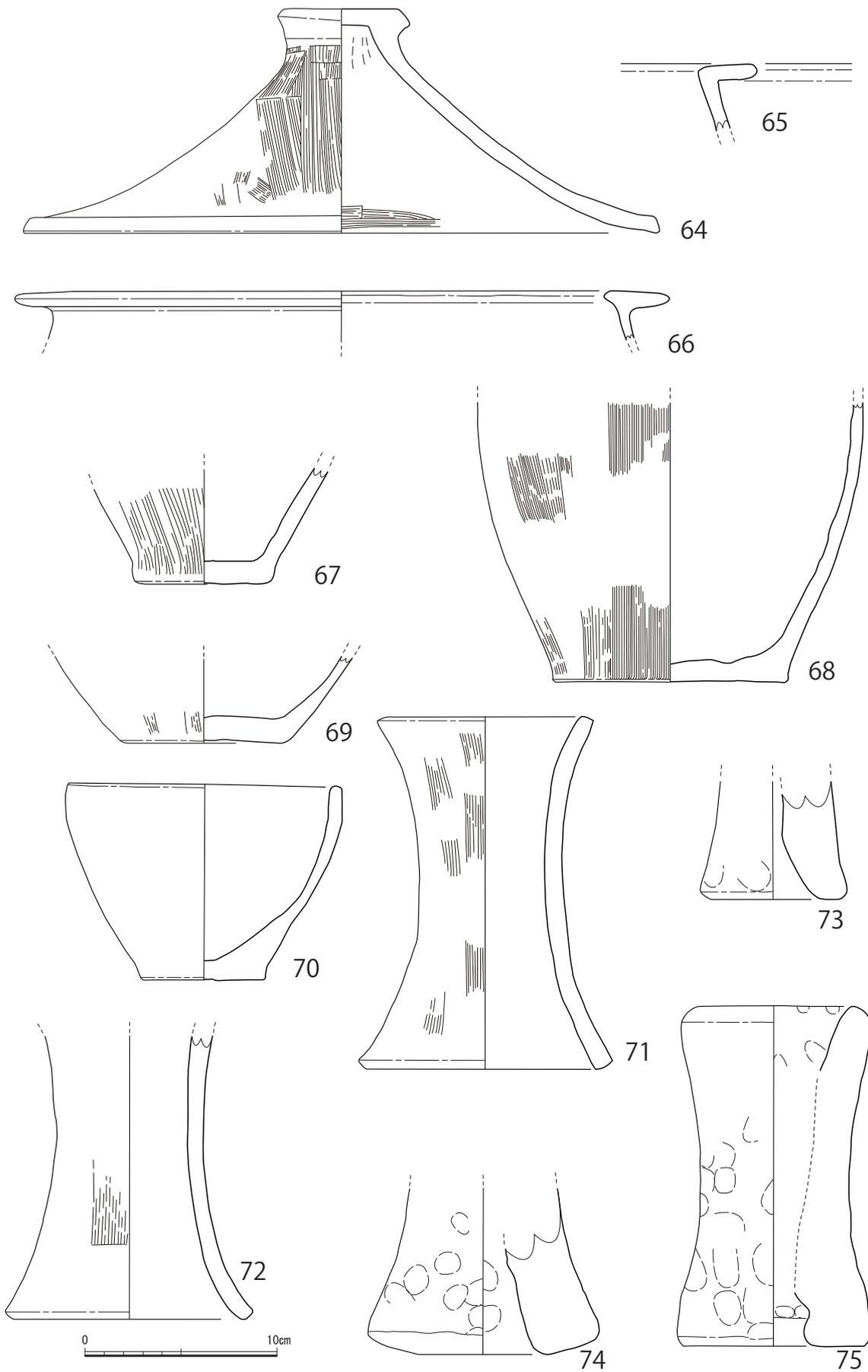
(2) 土坑墓

ST01（第 24 図、図版 3）

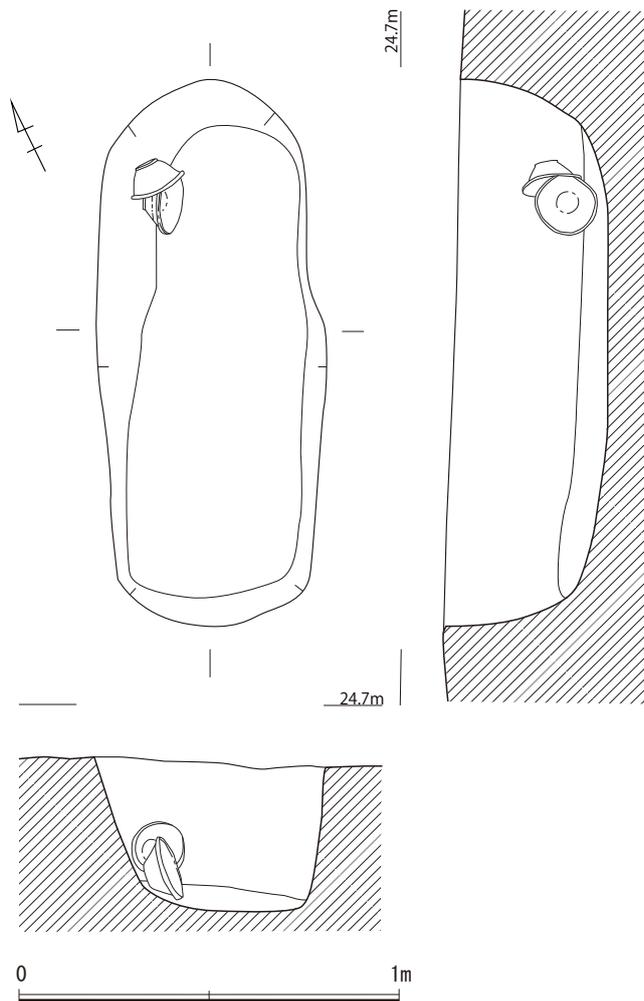
調査区北部に位置する。長軸やや東側にふれる略南北方向の墓坑で、平面形は北端部がやや丸みを帯びる隅丸長方形プランを呈する。長軸方向 150cm、短軸の最大幅 60cm を測る。遺構検出面からの深さは最大 40cm である。墓坑北西側には、2 点の白磁椀が床面から若干浮いた位置で重なるように出土した。出土遺物としては白磁椀のほか、土師器片や黒曜石碎片・サヌカイト片などが出土している。



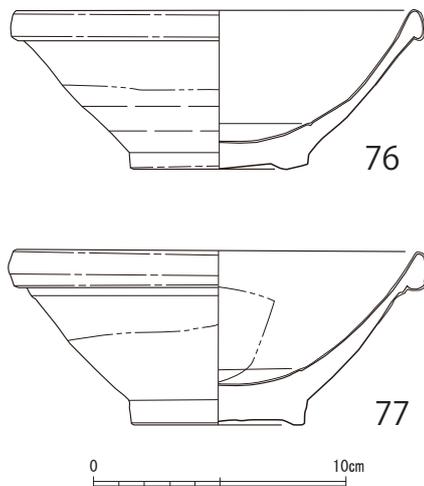
第22図 第3次調査 SC01・02実測図 (1/40)



第23図 第3次調査 SC02出土遺物実測図 (1/3)



第24図 第3次調査 ST01実測図 (1/20)



第25図 第3次調査 ST01出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (第25図、図版9)

白磁 (76・77) 76・77は椀。いずれも完形。大きな玉縁口縁を有し、底部は厚く作られている。太宰府分類IV類。76は釉が痘痕状になり発色も悪い。77は釉の発色や質感は良好であるが、内面の一部が無釉となっている。

(3) 土坑

SK02 (第26図、図版3)

調査区南東部、SC01の北側に位置する。平面形は、南北両端部や中央部がやや不整形を呈するが、主軸を略南北方向にとる長方形プランである。長軸方向で2.9m、短軸60～90cmを測る。床面までの深さは最大20cmが残存する。出土遺物としては図示した瓦器のほか、弥生土器・土師器片や黒曜石剥片などが出土している。

出土遺物 (第27図、図版9)

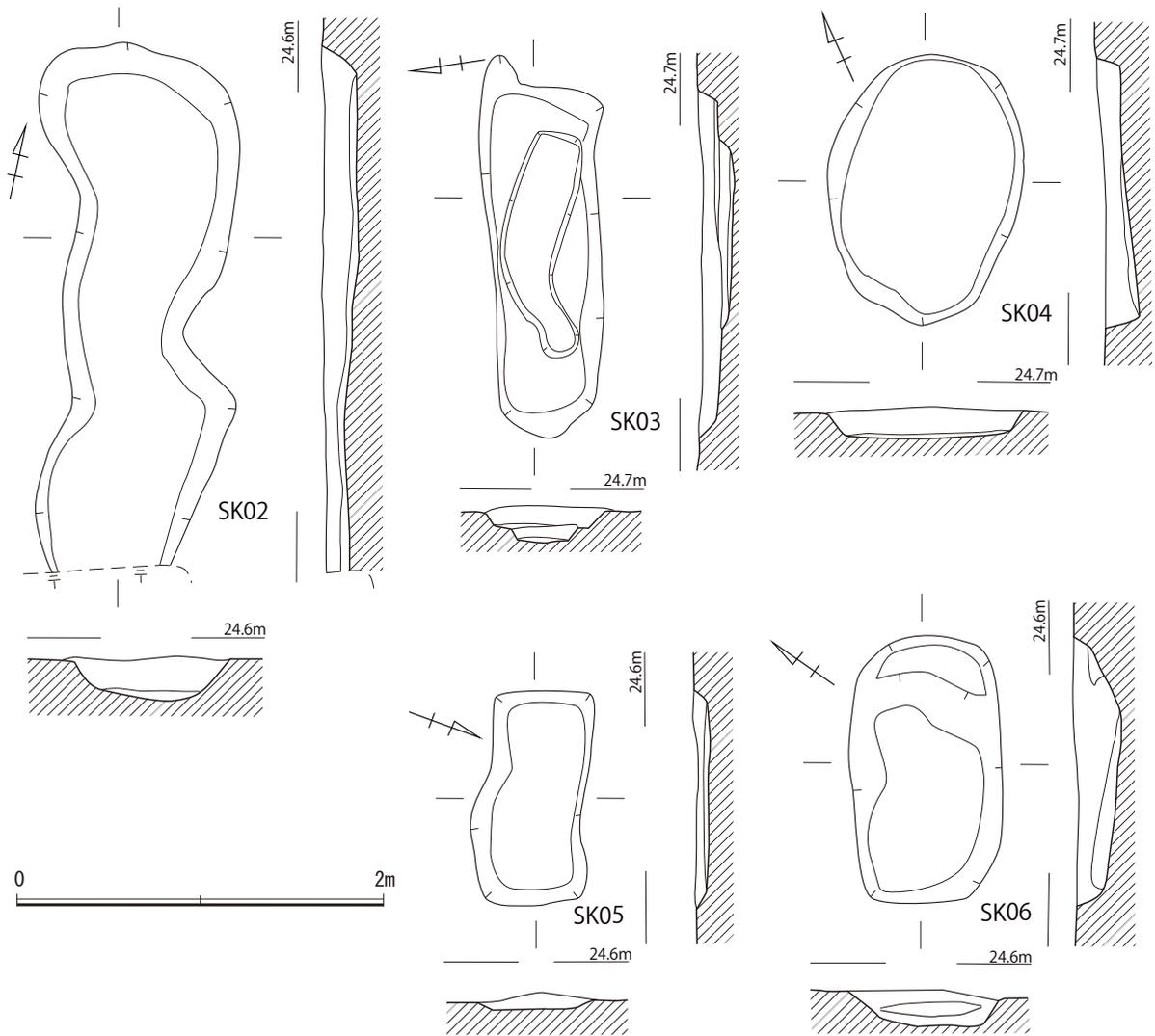
瓦器 (78) 78は椀。外面に指頭圧痕が残り、内外面のミガキはやや粗い。

SK03 (第26図)

調査区東部、SK04の北側、調査区東壁に接して位置する。平面形は長軸を略東西方向にとる、隅丸長方形プランを呈する。長軸方向2.0m、南北の幅は70cmである。床面までは深さ10～15cmが残存する。出土遺物は図示した白磁のほかに、図化できなかったが土師器杯の小片、瓦器片や滑石製石鍋の細片などが出土している。

出土遺物 (第27図)

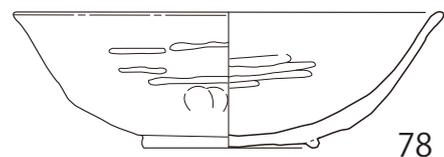
白磁 (79) 79は皿。外面は口縁部直下までしか施釉していない。



第26図 第3次調査 SK02~06実測図 (1/40)

SK04 (第26図)

調査区南東部、SK05の北側、SK03の南側に位置する。平面形は、略北東—南西方向にやや長い楕円形プランを呈する。北東—南西方向の長軸で1.5m、短軸1.1mを測る。深さは10~20cmである。小片のため図化に耐えないが、弥生土器片に加え、土師器片、須恵器および瓦器の小片が出土している。



78

SK05 (第26図)

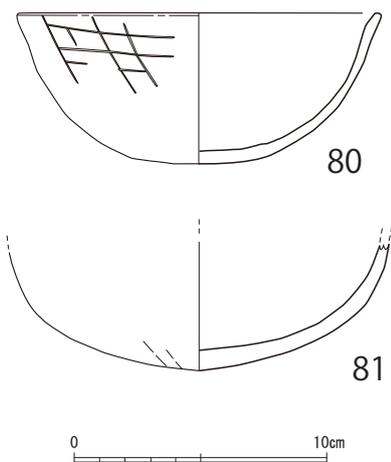
調査区南東部、SC01の北側に位置する。平面形は、やや北側にふれる略東—西方向に長軸をとる長方形プランである。長軸は1.2m、短軸60cmの規模である。床面までの深さは5cmである。図化に耐え



79



第27図 第3次調査 SK02・03出土遺物実測図 (1/3)



第28図 第3次調査
ピット出土遺物実測図 (1/3)

どが出土した。

出土遺物 (第28図、図版9)

土師器 (80・81) 80・81は鉢。同じピット (P60) から出土した。80の口縁部直下には、斜格子状に描かれた焼成前の線刻が確認できる。

ないが、弥生土器、土師器、瓦器、白磁片などが出土している。

SK06 (第26図)

調査区南東部に位置する。平面形は、長軸を略北東—南西方向にとる隅丸方形プランを呈する。土坑の規模は、長軸方向1.5m、短軸80cmで、床面までは深さ20cmほど遺存する。小片のため図化に耐えないが、弥生土器、土師器、瓦器の小片のほか、太宰府分類Ⅷ類の白磁や同安窯系青磁碗細片などが出土している。

(4) ピット出土遺物

ピットからは、弥生土器、土師器、瓦器、黒曜石碎片な

V. 総括

1. 時期ごとの様相

(1) **縄文時代**：2次調査 SC01（古墳時代竪穴建物）の埋土から晩期浅鉢が1点出土している。1次調査においても、後晩期と想定される石鏃等が出土しており、断片的ながら活動の痕跡が確認できる。

(2) **弥生時代**：2次調査 SK01、3次調査 SC01・02などが当該期の遺構である。時期比定可能な2次調査 SK01、3次調査 SC02については、いずれも須玖Ⅱ式（中期後葉）に位置づけられる。こうした状況は1次調査とも共通しており、中期後半に比較的大規模な集落が広がっていたと想定できよう。なお、1次調査と比べ、壺などの丹塗り土器が少なく、甕や器台・支脚が多い傾向がある。必ずしも分析可能な出土量とはいえないが、器種構成の傾向と場の機能の関連を考える上で留意しておきたい。

(3) **古墳時代**：2次調査 SC01、SD01、3次調査ピット（P60）が当該期の遺構である。2次調査 SC01は、古墳時代前期、柳田編年のⅡc期（4世紀中頃）に位置づけられる竪穴建物跡であるが、周辺に同時期の遺構は未発見である。3次調査のピットから出土した鉢（80・81）は5世紀代であろうか。80はほぼ完形に復元でき、斜格子状の線刻が特徴的である。2次調査 SD01は、南北方向に伸びる溝状遺構であり、埋土中位から6世紀中頃の須恵器杯身・杯蓋（23個体）、須恵器高杯蓋（1個体）、土師器高杯（1個体）、土師器甕（3個体）、土師器甗（1個体）、移動式カマド（1個体）、板状土製品（2個体）がまとまって出土した。比較的完存率が高い点、折り重なるように出土している点などから、一括廃棄されたものと想定される。なお、須恵器については、供膳具に特化している点、歪んだ資料が多い点、乙金窯跡（善一田遺跡1次調査）出土資料と酷似している点などが注目される。移動式カマドおよび一括遺物の意義については、次節以降で検討する。

このように古墳時代の松葉園遺跡は、特徴的な遺構が散見されるものの、年代的な連続性や面的な広がり是不明確であり、今後周辺の調査成果の蓄積が期待される。

(4) **奈良～鎌倉時代**：奈良時代から平安時代前期にかけての遺構・遺物は確認できない。再び遺構が確認できるのは、平安時代後期の2次 SD02、3次 ST01である。2次 SD02は東西に直線的に伸びる溝状遺構である。白磁椀Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類、東播系須恵器、瓦器椀、土師器皿などが出土しており、11世紀後半～12世紀に位置づけられる。3次 ST01は、白磁椀Ⅳ類2点を副葬した11世紀後半～12世紀前半の土坑墓である。白磁椀2点は北西側で重なるように出土しており、頭北面西の埋葬姿勢が想定できる。2・3次調査で検出したピットの多くは時期不明であるが、当該期集落の一角、あるいは集落に近接して造墓された可能性が高い。

2. 移動式カマドの位置づけ

はじめに

松葉園遺跡第2次調査では、6世紀中頃の土器群を伴い移動式カマドが出土した。ここでは、古墳時代における福岡県下の移動式カマドを取り上げ、その位置づけを検討する。

(1) 先行研究の整理

移動式カマドの基本論文となるのが稲田孝司氏による研究で、「付け庇」系と「曲げ庇」系の大きく2系統に分類し変遷を提示した。また、正倉院文書や延喜式の「韓竈」「辛竈」の記述に注目し、非日常的な炊飯具と位置付けた。近澤豊明氏は移動式カマドの基本的な属性を抽出し、型式分類と変遷を示した。製作技法の研究では、寺井誠氏が葦屋北遺跡出土事例の詳細観察に基づき百済系甑の製作技法を応用したことを指摘し、滋賀県出土の移動式カマドを検討した辻川哲郎氏は、「輪台技法」を採用している個体があることを確認した。系譜について、中野咲氏はタタキ成形の韓式系とハケを用いる土師器に大別した上で、複数の型式に分類し朝鮮半島出土資料との比較検討を行った。近年では、葦屋北遺跡の発掘調査でまとまった量の移動式カマドが出土し、合田幸美氏・藤田道子氏らにより詳細な検討が加えられている。一方、九州では佐賀県や鹿児島県など県単位での集成作業や年代的な位置づけが行なわれているものの、福岡県下では体系的な検討は行われていない。

(2) 分析

①分析の対象

福岡県下における5世紀～7世紀前半を対象とする。共伴遺物が明らかな資料のうち、残存状況が良好な資料を抽出し、破片資料や7世紀中頃以降の資料は適宜補完資料として取り上げる。

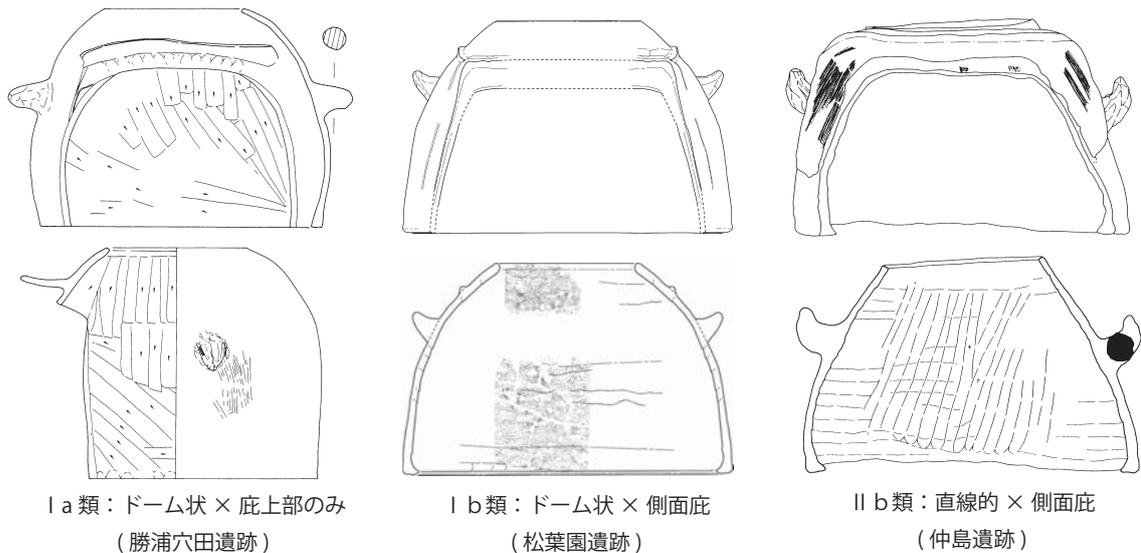
②分類と変遷

【移動式カマドの各種属性と傾向】

- ・系統：付け庇系、曲げ庇系、無庇のものがある。対象資料の中で曲げ庇は1例のみである。
- ・基本成形：正置成形と倒立成形がある。前者は内傾接合、後者は外傾接合との相関が強い。
- ・製作技法：通有の土師器同様に外面ハケ目・内面ケズリ調整のものとタタキ成形のものがある。
- ・形状：上部がドーム状を呈するのものと、全体的に直線的なものがある。
- ・庇：付け庇系は庇が焚口上部のみのもものと側面までおよぶものがある。
- ・把手：上向き・下向きのほか、把手がないものがある。
- ・口縁部：単純な口縁部を呈するものは端部が丸みを帯びるものと面取りするものがある。このほか、匙面状を呈するものや「く」の字状を呈するものがある。
- ・裾部：内側に突出するものと突出しないものがある。突出するものは正置成形と強く相関する。
- ・突帯：突帯があるものとないものがある。
- ・輪台技法：埴輪製作におけるいわゆる「淡輪技法」で、正置成形と相関する。

【型式分類（付け庇系を中心に）】

時間差を反映していると考えられる属性に、形状と庇の範囲がある。古相は全てドーム状（Ⅰ類）で上部のみに庇が付く（a類）ことが多い。ドーム状の形態は、造り付けカマドの形状を踏襲した可能性がある。新相は直線的な形状（Ⅱ類）が多く、庇が側面までおよぶもの（b類）が多い。直



第29図 移動式カマドの型式分類 (S = 1/12) ※各報告書より転載

線的な形状は製作の容易さという点で新しい要素と理解できる。

残存状況が良好な個体で形状・庇の相関関係を検討した結果、I a 類、I b 類、II b 類を抽出することができる(第29図)。なお、基本成形の正置/倒立の差は8世紀代においても同時並存していることから、時間的な変化を示す属性ではなく、製作技法上の系譜差を示す可能性が高い。

【変遷】

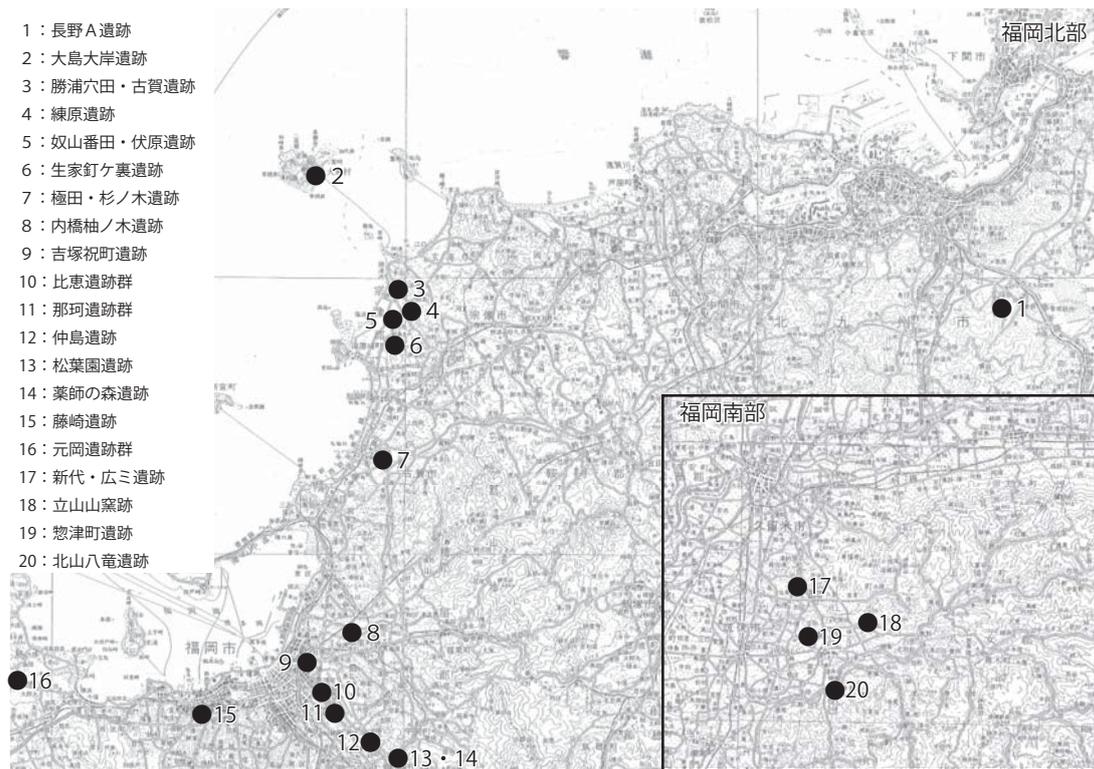
共伴資料との関係から、各型式の時間的位置づけを提示する。

- ・ 5世紀後半～6世紀前半：I a 類は長野 A 遺跡例や津屋崎古墳群周辺の諸例があり、5世紀後半～6世紀前半に位置付けられる。I b 類は6世紀前半の生家釘ヶ裏例や立山山1号窯例が該当し、いずれも6世紀前半頃の所産である。このほか、古賀市極田・杉ノ木遺跡例は唯一の曲げ庇(倒立成形)の事例で、6世紀前半代の土器が伴う。
- ・ 6世紀中頃以降：松葉園遺跡例はI b 類で、6世紀中頃に位置付けられる。II b 類は仲島遺跡例・藤崎遺跡例・比恵遺跡例・惣津町遺跡例などがあり、いずれも6世紀後半～末の土器が伴う。

③分布と遺跡の性格(第30図)

東北部九州(曾根平野)、津屋崎古墳群周辺、博多湾沿岸、八女丘陵周辺に分布の偏在性が認められるほか、宗像市大島大岸遺跡や古賀市極田・杉ノ木遺跡などに点在する。東北部九州は5世紀後半、津屋崎古墳群周辺は5世紀後半～6世紀前半前後、博多湾沿岸・八女丘陵周辺は6世紀中頃以降の移動式カマドが分布することから、分布差と時期差が相関する。

遺跡の性格としては、津屋崎周辺に顕著なように渡来人と関わる遺跡に分布する点が特徴的である。特に、生家釘ヶ裏遺跡例は鳥足文風のタタキ目を有し輪台技法を採用しており、渡来人が製作したと考えられる。極田・杉ノ木遺跡、松葉園遺跡、元岡遺跡群などでは同じ遺跡内や近接する遺跡で新羅土器・軟質系土器や溝付き竪穴住居が分布しており、間接的ながら渡来人との関わりを示唆する。このほか、大島大岸遺跡例は沖ノ島祭祀との関連が想定され、比恵・那珂遺跡群はミヤケ



第30図 北部九州における古墳時代の移動式カマド分布図

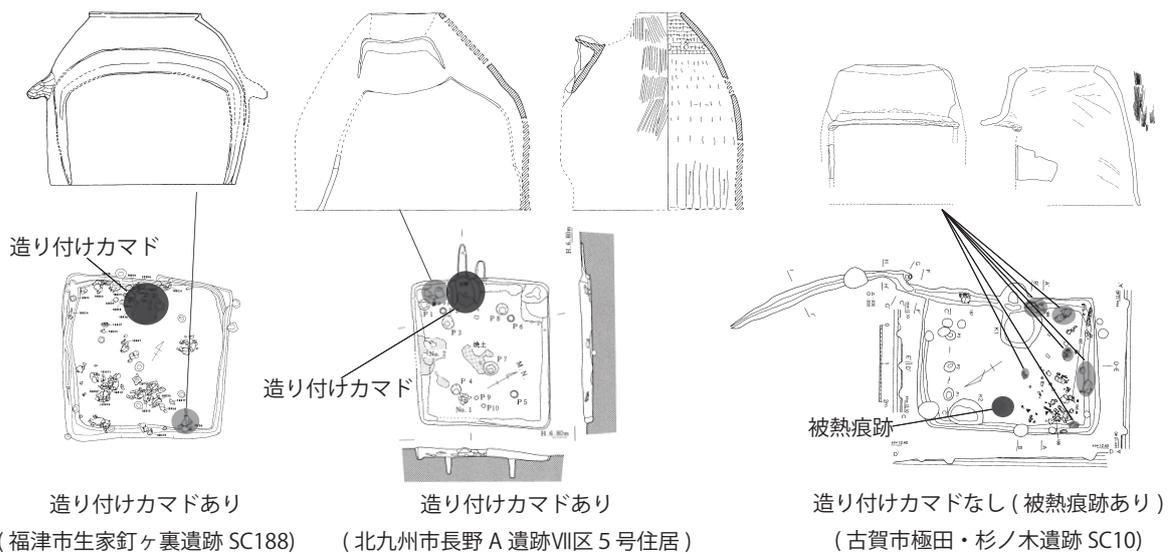
関連遺跡である。八女丘陵周辺の事例は、磐井の乱直後の6世紀中頃～後半に集中しており、乱後の変革と関わるものであろうか。

④出土状況の検討（第31図）

ほとんどが集落に伴い、住居・土坑・溝・自然流路からの出土例がある。古墳に伴うことはない。特異なものとして、埴輪窯出土例（立山山窯跡）や宗像・大島での出土例がある。残存状況が良好で使用状況や使用の場を推測できる事例を中心に検討した結果、以下の特徴が抽出できる。ただし、遺物出土状況は最終的な姿を示すに過ぎず、必ずしも使用状況を示すものではない。なお、実見した資料の多くは煤や被熱痕がないものが多く、使用頻度が少なかったことがうかがえる。

【集落内での使用】 集落内では圧倒的に竪穴住居に伴うことが多い。移動式カマドが伴う住居には、A：造り付けカマドがあるもの（a：同一住居床面に被熱痕跡あり、b：被熱痕跡なし）、B：造り付けカマドがないもの、がある。Bの場合、移動式カマドを日常の調理具として使用した可能性を示唆する（生家釘ヶ裏遺跡 SC178、長野 A 遺跡Ⅲ区 22 号住居、極田・杉ノ木遺跡 SC10）。A の場合、特に Aa においては日常の炊飯時には造り付けカマドを使用し、特別な時にのみ移動式カマドを使用したということも想定できる（生家釘ヶ裏遺跡 SC188、長野 A 遺跡Ⅶ区 5 号住居など）。

【集落縁辺部での使用】 居住域と近接もしくはやや離れた地点の溝・自然流路での事例である。仲島遺跡では集落の東側を南北にのびる大溝から移動式カマドとともに馬骨（20 体以上）、子持ち勾玉、須恵器大甕などが比較的まとまった状態で出土している。集落中枢部にあたる地点と想定され、なんらかの儀礼に使用されたと考えられる。惣津町遺跡・新代広ミ遺跡では自然流路から須恵器食



第31図 移動式カマドの住居出土状況（遺物：S = 1/20、遺構：S = 1/200）

※各報告書より一部改変して転載

器類・土師器調理具類とともに移動式カマドが出土した。特に新代広ミ遺跡では食器・貯蔵具ともに多量に出土しており、調理・飲食を伴う儀礼と考えられる事例である。

【集落外での使用】 松葉園遺跡の事例は、周辺に同時期の居住関連遺構がなく集落とは離れた場所での使用例である。須恵器食器類、土師器調理具のセットとともに移動式カマドが出土した。調理・飲食を伴う儀礼に使用されたことが確実視できる。上述の惣津町遺跡・新代広ミ遺跡の事例もこちらに近いものかもしれない。

以上のように、移動式カマドの使用状況は緩やかながらもいくつかの類型が指摘できる。先行研究で指摘されるとおり、基本的には非日常的な炊飯具と位置付けられる一方で、日常の調理具として使用したことを示唆する事例もある。なお、古墳時代の祭祀を特徴付けるミニチュア土器や滑石製模造品との共伴事例は極めて希少で、この点に儀礼の内容を推測する手がかりがありそうだ。

⑤系譜

最古の事例は北九州市長野 A 遺跡にあり、周防灘に開けた場所に位置する。付近には荒神森古墳・丸山古墳と続く 6 世紀中頃に出現する前方後円墳があり、大抜屯倉との関連が指摘される地域である。朝鮮半島的な要素は希薄である。3 個体の移動式カマドのうち全形がわかる 2 点は把手を欠き、5 号住居出土例は上部の庇が焚口よりも内側にあることや釜孔に大きな切り込みがあることなど、カマドの本来的な機能を有さない属性が見られる。こうしたことから、「土器でカマドを作る」という情報のみに基づき製作した可能性があり、間接的な影響のもと出現したものと理解できる。

個体数が最も多い津屋崎古墳群周辺では、生家釘ヶ裏遺跡のように渡来人が製作したと考えられるものがあることから、朝鮮半島との関わりを示唆する。ところが、正置技法にもかかわらず把手が下向きの事例があり、畿内を中心に分布する倒立技法・把手下向きの移動式カマドのうち形態的特徴の情報に基づき、渡来人が製作した可能性がある。なお、津屋崎に近い古賀市極田・杉ノ木遺跡例は対象資料の中で唯一倒立技法・曲げ庇の個体である。溝付き竪穴住居に伴う点からも百濟・

馬韓との関連性が推測される。また、大島大岸遺跡例は底が上部のみであることから6世紀前半以前に位置づけられるが、他に例がない特異な資料である。把手が下向きであることから津屋崎周辺の事例と共通する要素もあるが、全体的な要素は独自性が強いものである。

松葉園遺跡の事例は、タタキ成形である点で渡来人との関わりも想定される。周辺の乙金地区遺跡群で、6世紀中頃に渡来人を含む新来集団が出現する時期とも重なり、地域の脈絡の中では朝鮮半島との関わりも十分想定できる。ただし、松葉園遺跡例はタタキ成形であること以外に積極的に朝鮮半島との関わりを示す属性が乏しい。

6世紀後半以降の移動式カマド集中域である博多湾沿岸地域ではⅡb類が主流となる。形態・製作技法のほか、上向きの把手や基部を内側に肥厚する点など共通点が多く、比較的安定した器種と位置づけられる。ところが、八女地域では各個体の変異が大きく、数量的にも乏しいことから安定した器種とはならない。特に、北山八竜遺跡の事例は、通常の土師器甕の上半部のような形態で、日常的に使用している可能性が高いことから、独自に出現したものと理解できる。

以上、北部九州の移動式カマドの出現は各地域で多様な系譜を持つと考えられ、分布差が時期差を反映することとも矛盾しない。すなわち、地域ごとに出現契機が異なり、それぞれの地域の脈絡の中で移動式カマドが出現したと考えられる。畿内では事例が多い排煙孔や基部に脚を有す個体はなく、この点からも他地域からの直接的な影響は少ないものとみられ、「土器でカマドを作る」という情報の伝達に基づき、各地で独自に出現した可能性が高い。なお、津屋崎の練原遺跡長浦地区や仲島遺跡では北部九州では希少な羽釜が出土している。畿内では羽釜は付け底系の移動式カマドとセットになると考えられ、使用スタイルについても断片的に情報が流入したことがうかがえる。

(3) まとめ

北部九州の移動式カマドは東北部九州や津屋崎古墳群周辺で5世紀後半、博多湾沿岸地域や筑後地域で6世紀中頃以降に出現することを確認した。各地域の脈絡の中で多様な系譜のもと製作され、基本的には非日常的な調理具として使用されたと考えられる。なお、北部九州の移動式カマドの大半が奈良時代の所産であり、博多湾沿岸地域～大宰府にかけての地域に集中する。特に官衙関連遺跡に伴うことが多いことから律令祭祀の中に取り込まれていくと考えられるが、その過程については改めて検討の機会を設けたい。上記を踏まえ、次節では松葉園遺跡一括遺物の様相を整理する。

〔参考文献〕

1978 稲田孝司「忌の竈と王権」『考古学研究』第25巻第1号 / 1984 宇野慎敏「北九州市・曾根平野の古墳Ⅰ」『古文化談叢』第13集 / 1992 近澤豊明「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 / 2007 美浦雄二「移動式竈について」『中原遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第168集 / 2012 藤井大祐「大隈・薩摩の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』(第15回九州前方後円墳研究会) / 2015 合田幸美「竈形土器は韓式系土器であろうか」『韓式土器研究XIV』韓式土器研究会 / 2015 藤田道子「部屋北遺跡の移動式カマド」『韓式土器研究XIV』韓式土器研究会 / 2015 上床真「南部九州における古代のカマドに関する覚え書き」『縄文の森から』第8号(鹿児島県埋蔵文化財センター研究紀要・年報) / 2016 寺井誠「新たなものを生み出す渡来文化 - 「百済のようで百済ではない竈」の紹介を通じて -」『河内の開発と渡来人 - 部屋北遺跡の世界 -』(大阪

府狭山池博物館図録 18) /2016 辻川哲郎「古代における土器製作技術の一側面 – 長浜市横山城遺跡出土カマド形土器を中心にして –」『紀要 29』公益財団法人滋賀県文化財保護協会 /2018 中野咲「日韓における移動式カマドの展開様相」『研究紀要』第 22 集（由良大和古代文化研究協会）

※本稿をなすにあたり、以下の方々・機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略・五十音順）。

赤司善彦・井英明・榎本義嗣・太田智・甲斐孝司・上角智希・亀田修一・辻川哲郎・寺井誠・崎野祐太郎・中村利至久・西谷正・原俊一・舟山良一・山口裕子・山口裕平・大野城市ふるさと文化財課先輩同僚諸氏・北九州市埋蔵文化財調査室・古賀市教育委員会・福岡市埋蔵文化財センター・福津市教育委員会・宗像市教育委員会

3. 松葉園遺跡の一括遺物の意義

はじめに

本文中で報告したように、松葉園遺跡 2 次調査 SD01 からは投棄・埋没の同時期性が確実にできる一括遺物の状態で 6 世紀中頃の遺物群が出土した。出土状況が良好であることにくわえ、先述した移動式カマドなど特殊な遺物も含んでいることからその意義について検討する。これら遺物群は一連の儀礼行為の結果を示すと考えられ、以下では「当該行為」と記述する。

(1) 出土地点・出土状況

①出土地点 乙金山麓から西に派生する低丘陵上に位置する。調査区内に同時期の遺構はなく、松葉園遺跡全体で見ても、同時期の遺構はない。近接地では善一田遺跡をはじめとする集落や乙金窯跡など同時期の遺跡が展開し、6 世紀中頃に進出した新来集団の存在が明確である。なお、出土地点の真東は乙金山の山頂にあたる。

②出土状況 溝の中から多数の遺物が重なり合うように出土した。多くが破片になっており正置していないことから、意図的な埋納ではない。完形率が高く須恵器に型式差がないこと、お互いが密着していることから周囲からの流れ込みではなく、当該行為後に一括投棄された可能性が高い。

(2) 出土遺物の概要

【須恵器食器類（第 8 図・第 9 図 32）】 杯蓋 14 点、杯身 9 点、高杯蓋 1 点がある。Ⅲ A 期～Ⅲ B 期古段階に位置づけられ、焼成不良品や歪んだ資料を含む。乙金窯跡から供給された可能性が高い。

【須恵器系土師器高杯（第 9 図 33）】 酸化焰焼成であるが、須恵器の技法で製作する。杯部の 1 / 3 および脚裾部を欠く。

【土師器甌（第 9 図 35）】 ほぼ完形品である。薄く丁寧なつくりで、底部は単孔である。使用痕はほとんど認められない。

【土師器甕（第 9 図 36・37）】 2 点ある。36 は薄く丁寧なつくりである。残存は 1 / 2 程度で、外面は黒色を呈す部分があり、使用痕（煤か）の可能性が高い。37 はやや粗いつくりの長胴甕で、器面は被熱のためか、一部赤く発色する。

【須恵器系土師器甕もしくは焼成不良須恵器（第 9 図 34）】 外面平行タタキ、内面同心円当具を有す中型の甕で、調理具ではなく貯蔵具である。残存は 1 / 2 ～ 1 / 3。

【移動式カマド】 付け底系統。外面平行タタキ、内面同心円当具を有す。天井部はドーム状を呈し、焚口上部には幅狭の庇、焚口側面には突帯状の小さな庇を有す。焚口上部に突帯がめぐる。煤や被熱痕など使用痕はほとんど確認できない。

【板状土製品 A】 平面長方形の板状土製品である。調整の精粗や厚さの違い・端部の状況から表裏・天地を区別して製作されたと考えられる。表面には線刻があり、黄色・黒色・赤色の付着物が認められる。注目されるのが、表面の線刻である。最終調整後に表面全体に線刻がおよぶことから、偶然の所産ではなく意図的なものである可能性が高い。船など実態のある器物をモチーフとした絵画である可能性も考えたが、現状では類例が乏しく線刻そのものの解釈はできていない。北部九州には類例がないに等しく、鋤崎古墳や有田遺跡で板状土製品があるが、直接的に関連するかどうかは不明である。また、U字形土製品（カマドの枠板）の可能性も想定したが、湾曲しないことや大きさから可能性は低い。したがって、板状土製品そのものの位置づけも不明と言わざるをえない。

【板状土製品 B】 平面長方形の板状土製品で、調整の精粗や厚さの違い・端部の状況から表裏・天地を区別して製作されたと考えられる。板状土製品 A より一回り大きく、わずかに薄い。表面の一部に線刻、裏面には竹管状の工具による押圧痕がある。板状土製品 A と同様、性格不明である。

（3）使用状況の復元

移動式カマド、土師器甕・甕のセットから、当該行為が調理を含むことは間違いない。このうち、移動式カマドとセットになるのは、釜孔の直径と土器の大きさから第9図37の土師器甕が候補となる。また、移動式カマド自体が極めて希少であることにくわえ、調理具はいずれも使用痕がほとんど認められないことや通常の調理具と比べ丁寧な作りであることから、当該行為のために特別に製作された可能性もある。さらに多数の食器類が伴うことから飲食を伴うと想定でき、食器類の多さから複数の人物が当該行為に参加したと考えられる。須恵器甕は調理用の水もしくは酒など液体の容器であろうか。板状土製品 A・B はその特殊性・希少性から特殊な器物であることが間違いなく、当該行為の中で使用されたと考えられる。周囲に同時期の集落遺構が希薄であることを考慮すると、集落外における調理・飲食を伴う儀礼に使用された遺物群と考えられる。

（4）まとめ

結論を述べると、松葉園遺跡 SD02 一括遺物は調理・飲食を伴う儀礼に使用された遺物群で、儀礼に使用した道具のセットが判明する点で重要である。時期は6世紀中頃(ⅢA期～ⅢB期古段階)で、周囲の山麓部で同時多発的に小規模集落が出現し、各種手工業生産が展開する時期に該当する。当地域の盟主墳である善一田18号墳の築造直前の時期でもある。儀礼の内容については詳細を明らかにできないが、地域の歴史的な背景からアプローチすることにより、儀礼の内容をより明確に位置づけることが可能となろう。また、当該期の祭祀遺物とされる滑石製模造品類やミニチュア土器類を欠如することも特徴の一つで、これらを使用した儀礼とは異なる性質のものであった可能性もある。今後は、古墳時代の儀礼全般からの相対的な比較検討が必要である。

※板状土製品の線刻については、赤司善彦氏・寺井誠氏・深澤芳樹氏よりご指導を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げます。

4. 中世墓の位置づけについて

土坑墓（3次調査 ST01）の位置づけについて、周辺遺跡検出の中世墓と合わせて検討したい。

（1）ST01 の概要と遺跡内での位置づけ

3次調査 ST01 は、調査区の北側で検出された 11 世紀後半から 12 世紀前半の土坑墓である。墓坑は、1.5 × 0.6 m の隅丸長方形プランを呈し、主軸方向は略南北方向となる。墓坑内北西側には、白磁椀 2 点が、床面から若干浮き、重なった状態で出土した。主軸方向と埋納陶磁器の出土位置から頭北面西の埋葬姿勢が想定され、白磁椀は棺外副葬であった可能性が高い。

土坑墓周辺の状況については、攪乱が広がるため判然としないが、現況では 1 基のみの検出であり、単独で存在したものであろうか。また調査区内には、明確な同時期遺構はないが、隣接する 2 次調査地点では溝状遺構（SD02）が確認されていることや、ピット群の一部が同時期の可能性があることから、集落の一端に造墓された屋敷墓的な位置づけが想定できよう。

（2）周辺遺跡の事例

中世墓の検出は、松葉園遺跡では 3 次調査 ST01 のみであるが、近接する中・西コモリ遺跡、森園遺跡、薬師の森遺跡を含めると、20 基以上が確認されており、中世墓研究を進める上でも重要な地域といえよう。9～14 世紀の墓および関連遺構をまとめたのが表 1 であり、貿易陶磁器を埋納した土坑墓・木棺墓のみを示したのが第 32 図である。

表 1 と第 32 図を見て感じるのは、大きく次の 3 点であろう。

- ① **陶磁器埋納割合の高さ**：古代前期（9～10 世紀初頭）3 基、時期不明 3 基、火葬土坑 2 基を除く 22 基が 11 世紀後半～14 世紀初頭の土坑墓・木棺墓である。このうち貿易陶磁器埋納墓は 21 基、土師器のみの埋納墓は 1 基であり、貿易陶磁器保有率は 95% に上る。

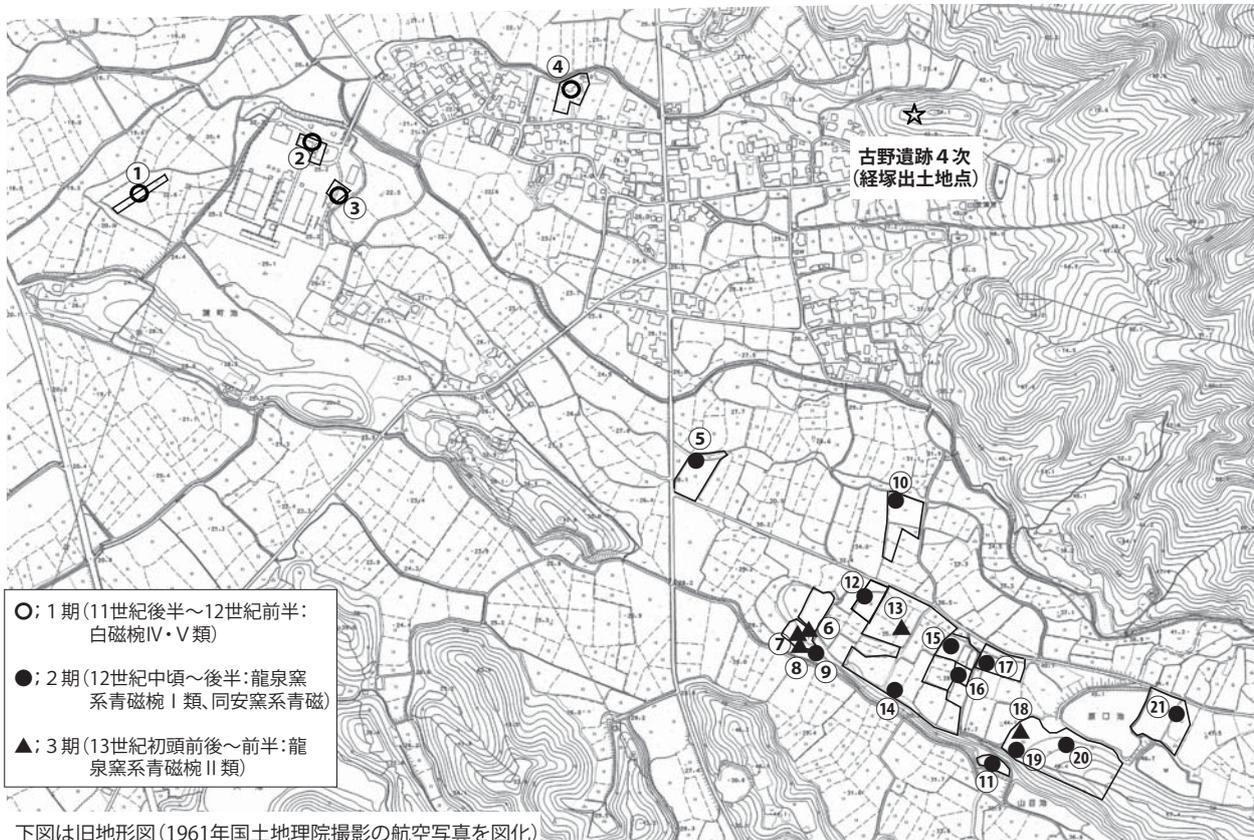
また、中には青磁椀 2 点・青磁小皿 5 点が出土した薬師の森遺跡 3 次調査 SX11、青磁椀 2 点・青磁小皿 4 点が出土した薬師の森遺跡 42 次調査 SX01 など、陶磁器保有数が多い土坑墓・木棺墓が存在する。このことから富裕層の存在も想起されるが、その一方で陶磁器以外の副葬品は特筆すべきものはなく、慎重な位置づけが必要であろう。いずれにしても、陶磁器保有率の高さはこの地域の特色であり、地理的にも経済的にも博多との近縁性が窺われる。

- ② **龍泉窯系青磁椀への嗜好性**：12 世紀中頃～後半は、龍泉窯系青磁椀 I 類と同安窯系青磁椀に代表される段階であるが、埋納された青磁椀では、龍泉窯系青磁椀 I 類が主体的に出土し、同安窯系青磁椀の出土は 1 期に分類した 1 例（森園遺跡 SP03：白磁椀 IV 類に伴出）のみである。一方、小皿に関しては、龍泉窯系はなく、同安窯系あるいは土師器で構成されている。この傾向の有意性を認定するためには、集落全体の出土比率との比較、および他地域の墳墓出土資料との比較が必要となる。統計的な分析については機会を改めたいが、龍泉窯系青磁椀、同安窯系青磁皿に対する嗜好性・選択性は明らかであろう。
- ③ **時期別にみた分布の偏在性**：表 1、第 32 図にある遺跡は、いずれも大城山・乙金山から西側に派生する丘陵上に位置するが、1 期（11 世紀後半～12 世紀前半：白磁椀 IV・V 類）については、松葉園遺跡、中・西コモリ遺跡、森園遺跡といった比較的平野に近い場所（標高 20 m 台）に造墓されている。これに対し、2 期（12 世紀中頃～後半：龍泉窯系青磁椀 I 類、同安

表 1 乙金地区周辺の中世墓関連遺構（9～14世紀）

遺跡名	立地	図中番号	遺構名	種類	副葬品	時期	参考文献
中・西コモリ遺跡	低丘陵(標高20m)	①	4T土墳墓	木棺墓	白磁椀1(V-2)、土師皿3	11c後～12c前	大野城市第2集
森園遺跡B	低丘陵(標高20～24m)	②	SP01	土坑墓	白磁椀1(IV)、青白磁合子1、土師皿2、鉄刀1	12c中～後	大野城市第26集
			SP02	土坑墓?	不明鉄器1	不明	
		③	SP03	土坑墓	白磁椀1(IV)、青磁椀1(同)、土師杯1、土師皿5	11c後～12c前	
松葉園遺跡3次	低丘陵(標高25m)	④	ST01	土坑墓	白磁椀2(IV類)	11c後～12c前	本書
中・寺尾遺跡	丘陵尾根(標高27m)		1号土坑墓	土坑墓	土師器杯5	9c中～後	大野城市第54集
薬師の森遺跡2次	丘陵緩斜面(標高28m)	⑤	土坑墓	土坑墓	青磁椀1(龍I)、青白磁合子1	12c中～後	大野城市第189集
薬師の森遺跡9次	丘陵南斜面(標高30m)	⑥	SX11	土坑墓	青磁椀1(龍II)	13c前後～前	大野城市第106集
		⑦	SX22	土坑墓	青磁椀1(龍II)	13c前後～前	
		⑧	SX23	土坑墓	青磁椀3(龍II)、土師器杯1	13c前後～前	
		⑨	SX27	土坑墓	青磁椀1(龍I-4)、刀子	12c中～後	
薬師の森遺跡8次	段丘緩斜面(標高32m)	⑩	SX135	木棺墓	青磁椀1(龍I-4)、土師皿3、銅銭1、刀子?、鉄釘28	12c中～後	大野城市第114集
薬師の森遺跡12次	丘陵尾根(標高34m)		SX12	土坑墓	土師器杯1・小皿1	13c初頭前半	大野城市第106集
薬師の森遺跡3次	丘陵南斜面(標高35m)	⑪	SX11	木棺墓	青磁椀2(龍I-4)、青磁小皿5(同)、鉄釘5	12c中～後	大野城市第90集
薬師の森遺跡10次	丘陵緩斜面(標高36m)	⑫	SX05	土坑墓	青磁椀1(龍II)	13c前後～前	大野城市第102集
薬師の森遺跡7次	丘陵尾根(標高36～38m)	⑬	SX21	土坑墓	青磁椀1(龍I-4)、鉄刀1	12c中～後	大野城市第120集
⑭	SX230	土坑墓	青磁椀1(龍II)、土師器杯2	13c前後～前			
薬師の森遺跡34次	丘陵尾根(標高37m)	⑮	SX34	土坑墓	青磁椀1(龍I-2)、青磁皿1(同)	12c中～後	大野城市第115集
古野遺跡6次	丘陵緩斜面(標高38m)		SX05	火葬土坑	(焼人骨、炭化材)		大野城市第143集
薬師の森遺跡32次	丘陵尾根(標高39m)		SX12	火葬土坑	(焼人骨、炭化材)		大野城市第115集
薬師の森遺跡42次	丘陵尾根(標高39m)	⑯	SX01	土坑墓	青磁椀2(龍I-4)、青磁皿4(同)	12c中～後	大野城市第145集
薬師の森遺跡30次	丘陵尾根(標高39m)	⑰	SX01	土坑墓	青磁椀1(龍I-1a)	12c中～後	大野城市第112集
薬師の森遺跡22次	丘陵緩斜面(標高45m)	⑱	SX09	土坑墓	青磁椀1(龍I-4)	12c中～後	大野城市第115集
薬師の森遺跡4次	丘陵尾根(標高47～50m)	⑲	SX01	土坑墓	青磁椀1(龍II-c)	13c中～14c初	
		⑳	SX02	土坑墓	青磁椀1(龍I-4)、鉄刀1	12c中～後	
			SX03	土坑墓	なし		
			SX11	土坑墓	なし		
			SX12	土坑墓	土師器杯3	9c末～10c初	
	SX27	土坑墓	青磁椀1(龍I-2)	12c中～後			
⑳	SX28	土坑墓	土師器杯5	9c中～後			

・遺跡の掲載順序は標高の低い順 図中番号は第32図に所在を記載した墓(貿易陶磁器を埋納した土坑墓・木棺墓)
 ・副葬品の(龍)は龍泉窯系、(同)は同安窯系



下図は旧地形図(1961年国土地理院撮影の航空写真を図化)

第32図 貿易陶磁器を埋納した中世墓分布図(1/8,000)

窯系青磁椀)・3期(13世紀初頭前後～前半:龍泉窯系青磁椀Ⅱ類)については、薬師の森遺跡(標高30～40m台中心)に集中する状況が確認できる。集落も墓と類似した動態が認められ、開発が丘陵上部に広がっていった状況を示しているといえよう。

(3) 中世墓と集落の展開

当該地の中世墓および集落の動向について、簡単にまとめておきたい。

0期(9～10世紀)

薬師の森遺跡4次で土坑墓2基を確認し、隣接して掘立柱建物も検出している。当該期の集落は隣接地(19次など)まで広がっているが、その規模は小さく、時間的にもあまり継続しない。

1期(11世紀後半～12世紀前半)

先述のとおり、松葉園遺跡、森園遺跡、中・西コモリ遺跡といった比較的平野部に近い遺跡(標高20m台)で計4基検出されている。集落との関係は判然としないが、同時期の遺構分布や遺物の出土状況から、集落内あるいは集落に近接して造墓されたと考えられよう。

なお、当該期(12世紀前半)には、集落から離れた見晴らしのよい丘陵上(古野遺跡)で経塚が造営されている。大規模開発が行われる直前期に相当することから、「土地の浄化や開発の正当性を担保するための埋経行為」であったと理解されている(上田2017)。

2期(12世紀中頃～後半)

薬師の森遺跡2・3・4・7・8・9・22・30・34・42次で合計11基検出されている。先述したとおり、当該期には丘陵上に集落が広がり、多くの墓は集落域に点在する。集落関連遺構と墓の詳細な時期的検討は今後の課題であるが、概ね並存することは確実であり、また建物跡からやや離れること、区画溝の付近で検出されること、単独で営まれることなど、屋敷墓としての性格が想起される。一方、丘陵斜面の狭小な平坦地に造墓された事例(3・9次調査)や、集落からやや離れ複数基検出された事例(4次調査)も存在する(計4例)。これらを屋敷墓として位置づけるか否かは議論があろう。

3期(13世紀初頭前後～前半)

薬師の森遺跡4・7・9・10次で計6例検出されている。墓の分布は2期と重複する。集落も2期から引き続き営まれているが、屋敷墓的なあり方は、10次調査(SX05)、7次調査(SX230)のみであり、屋敷墓の被葬者が「その地を開発した先祖に限られる」という先行研究(勝田1988)を追証するものといえよう。

(4) まとめ

当該地域の中世墓については質・量ともに充実しており、開発史の視点から注目できるだけでなく、陶磁器埋納割合の高さなどの特色も指摘できよう。さらに2期に見られる屋敷墓の広がりと同質的な埋納品の組成は、屋敷墓の被葬者像復元にアプローチできる資料として重要である。

[主要参考・引用文献]

上田龍児 2017「V.総括 5.古野遺跡経塚と経筒」『乙金地区遺跡群21〈下巻〉』大野城市教育委員会

勝田 至 1988「中世の屋敷墓」『史林 71巻3号』史学研究会

狭川真一 2011『中世墓の考古学』高志書院

中世墓資料研究会 2004「福岡県」『中世墓資料集成一九州・沖縄編(1)一』

松葉園遺跡第2次調査遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値)(残存値)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
1	土師器	高杯	SC01	①(14.7) ②12.55 脚部径(12.8)	杯部内面ナデ 杯部外面ヨコナデ 脚部内面削り 脚部外面上半ナデ 脚部外面下半ヨコナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内外 10YR 7/3 にぶい黄褐色	
2	土師器	高杯	SC01 南区	②(11.2) 頸部径 3.5 脚部径 12.7	脚部内面削り 他はナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 7.5YR 7/4 にぶい橙色	
3	土師器	甕	SC01 床	①(16.2) ②(21.7)	外面ハケ目 内面削り	A: やや粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 7/1 明 褐色～7.5YR 4/1 褐色 外 7.5YR 6/4 にぶい橙色～7.5YR 3/1 黒褐色	外面黒斑あり
4	縄文土器	浅鉢	SC01	②(6.3)	内外面ミガキ	A: 密 B: 良好 C: 内 7.5YR 5/4 にぶい 褐色 外 5YR 5/6 明褐色～5YR 3/2 暗赤 褐色	
5	弥生土器	壺	SC01	①(22.0) ②(3.7)	内外面ミガキ?	A: 密 B: 良好 C: 内外 2.5YR 5/8 明赤 褐色	内外面丹塗りの痕跡
6	弥生土器	甕	SC01 北区	①(30.4) ②(7.5)	外面ハケ目 内面ナデ 他はヨコナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 6/6 橙 色 外 5YR 5/4 にぶい赤褐色	
7	弥生土器	甕	SC01 北区	②(3.15) ③(7.0)	外面ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 外 10YR 6/6 赤 褐色～5YR 7/3 にぶい橙色	
8	土製品	投弾	SC01 北区	長さ 2.3 幅 1.85 厚さ 1.9 重さ 7.3 g	ナデ?	A: やや密 B: 良好 C: 10YR 7/2 にぶい 黄褐色～10YR 4/1 褐色	
9	須恵器	杯蓋	SD01	①14.0 ②4.6	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 N6/ 灰色 外 10YR 7/1 灰白色～N3/ 暗灰色	外面降灰 歪みあり
10	須恵器	杯蓋	SD01	①14.0 ②4.25	天井部外面回転ヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 N4/ 灰色～N3/ 暗灰色	口縁部外面降灰 歪みあり
11	須恵器	杯蓋	SD01	①14.8 ②4.1	天井部外面回転ヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 5Y 7/1 灰白色	やや歪みあり 外面一本ひだすきあり
12	須恵器	杯蓋	SD01	②(4.2)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: 粗 B: 良好 C: 内外 N6/ 灰色	歪みあり 外面降灰あり
13	須恵器	杯蓋	SD01	①14.9 ②4.4	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 N5/ 灰色	やや歪みあり 外面一本ひだすきあり
14	須恵器	杯蓋	SD01	①15.0 ②4.55	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 N6/ 灰色 外 N6/ 灰色～N3/ 暗灰色	外面降灰・別個体 付着 歪みあり
15	須恵器	杯蓋	SD01	①長径 15.1 短径 10.7 ②5.2	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 N5/ 灰色～N3/ 暗灰色	歪みあり
16	須恵器	杯蓋	SD01	①長径 16.0 短径 11.0 ②5.55	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内外 N5/ 灰色～ 10YR 7/3 にぶい黄褐色	内外面降灰 歪みあり
17	須恵器	杯蓋	SD01	①長径 15.4 短径 11.7 ②4.35	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: N6/ 灰色	歪みあり
18	須恵器	杯蓋	SD01	②(4.2)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 2.5GY 3/1 暗 オリーブ灰色 外 10YR 3/1 黒褐色	歪みあり 内面降灰 外面別個体溶着
19	須恵器	杯蓋	SD01	②(4.2)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや密 B: 軟質 C: 内 2.5Y 7/2 灰黄 色 外 7.5Y 6/1 灰色	外面ヘラ記号あり
20	須恵器	杯蓋	SD01	②(4.45)	天井部外面回転ヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 10YR 7/2 にぶい黄褐色	外面降灰
21	須恵器	杯蓋	SD01	①15.3 ②4.9	天井部外面回転ヘラ削り 天井部内面ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 N5/ 灰色～10YR 7/2 にぶい黄褐色	口縁部内外面降灰 内面重ね焼き痕あり 外面ヘラ記号あり 歪みあり
22	須恵器	杯蓋	SD01	①長径 15.8 短径 12.6 ②5.0	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色～ 10YR 8/2 灰白色 外 10YR 6/2 灰黄褐色～ N3/ 暗灰色	口縁部内面～外面 降灰 外面ヘラ記号あり 歪みあり
23	須恵器	杯身	SD01	①13.5 ②5.2 受部径 14.8	底部外面ヘラ切り未調整 体部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 N5/ 灰色	歪みあり
24	須恵器	杯身	SD01	①13.65 ②4.7 受部径 15.05	底部外面回転ヘラ削り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 2.5Y 6/1 黄灰色	歪みあり
25	須恵器	杯身	SD01	①12.6 ②5.2 受部径 14.8	底部外面回転ヘラ削り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 軟質 C: 内 10YR 8/3 浅黄橙 色 外 10YR 6/1 褐色	
26	須恵器	杯身	SD01	①12.0 ②4.0 受部径 14.5	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 N5/ 灰色	
27	須恵器	杯身	SD01	②(4.4) 受部径 15.3	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 良好 C: 内外 2.5Y 6/1 黄灰色	歪みが著しい
28	須恵器	杯身	SD01	①14.8 ②4.5 受部径 13.3	底部外面ナデ一部回転ヘラ削り 底部内面当て具痕あり 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 5Y 6/1 灰 色	歪みあり

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(復元値) (残存値)	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
29	須恵器	杯身	SD01	① 13.0 ② 5.5 受部径 14.8	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 N5/ 灰色 外 N3/ 暗灰色～ 10YR 7/4 にぶい黄橙色	外面降灰・別個体溶着 外面ヘラ記号あり 歪みあり 重ね焼き痕あり
30	須恵器	杯身	SD01	① 12.8 ② 5.4 受部径 15.6	底部外面回転ヘラ削り 底部内面当て具痕 他は回転ナデ	A: やや密 B: やや軟質 C: 内外 2.5Y 7/2 灰黄色	歪みあり 外面ヘラ記号あり
31	須恵器	杯身	SD01	① 15.6 ② 6.4 受部径 18.0	底部外面回転ヘラ削り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 不良 C: 内外 10YR 8/1 灰白色	内面中位一部爪痕あり
32	須恵器	高杯蓋	SD01	① 16.8 ② 5.7 つまみ径 3.7 つまみ高 3.8	天井部外面回転ヘラ削り 天井部内面不定方向ナデ 他は回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内外 N6/ 灰色	重ね焼き痕あり 外面別個体溶着 外面一部自然袖付着 歪みあり
33	土師器	高杯	SD01	① (18.0) ② (14.7) 頸部径 3.8	杯部底部外面カキ目 脚部内面上端シボリ痕あり 脚部内面下端削り後ナデ 他はヨコナデ	A: 密 B: 不良 C: 内外 10YR 8/4 浅灰色	杯部と脚基部の図上復元
34	土師器	甕	SD01	① 29.8 ② (34.9)	外面擬格子目叩き 内面同心円文当て具痕 口縁部内外面回転ナデ	A: やや粗 B: 軟質 C: 内外 7.5YR 8/4 浅黄橙色	
35	土師器	甕	SD01	① 33.4 ② 32.2 ③ 9.0	外面ハケ目 内面削り 把手部ハケ状工具痕あり	A: やや粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 6/6 橙色 外 7.5YR 7/4 にぶい橙色～ 7.5YR 2/1 黒色	外面黒斑あり
36	土師器	甕	SD01	① 19.2 ② (25.4) ⑤ (29.6)	外面ハケ目 内面削り 肩部内外面指頭圧痕あり 口縁部内外面ヨコハケ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 6/6 橙色～ 7.5YR 3/1 黒褐色 外 5YR 6/6 褐色～ 5YR 2/1 黒褐色	外面黒斑あり
37	土師器	甕	SD01	① (19.0) ② (20.3) ⑤ (22.8)	外面ハケ目 内面削り 胴部内面指頭圧痕あり	A: やや粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 5/2 灰褐色～ 7.5YR 4/1 褐灰色 外 5YR 7/6 褐色～ 5YR 2/1 赤黒色	
38	土師質土器	移動式カマド	SD01	① (釜口径) 22.4 ② 33.6 ③ 52.2 焚口幅 42.0 ?	外面平行タタキ 内面同心円文当て後ナデ消し一部指オサエ 裾部内面指オサエ後ナデ一部ケズリ 底貼付け後ナデと指オサエ 焚口部切り取り後ナデ 裾端部輪状の圧痕・刺突痕あり	A: やや精良 B: 良好 C: 内 7.5YR 4/4 褐色～ 10YR 6/4 にぶい黄褐色 外 7.5YR 6/6 褐色	内外黒変部分少しあり
39	土製品	板状不明品	SD01	残存長 44.0 幅 13.3 ～ 14.05 厚さ 3.25 ～ 4.1	工具ナデと指ナデによる一次調整 後ケズリによる 2 次調整 2 次調整後線刻 指頭圧痕あり	A: 密 B: 良好 C: 7.5YR 6/6 褐色～ 7.5YR 4/1 褐灰色	中央部を中心に粘土状の橙色付着物あり 一部黒色付着物あり 黒斑あり
40	土製品	板状不明品	SD01	残存長 49.5 幅 17.4 ～ 19.3 厚さ 2.0 ～ 2.4	ハケ状調整後ケズリ後ナデ 一部ミガキあり 側面ケズリによる面取り 棒状・球状の粘土を貼り合わせ成形 一方が厚く、一方が薄いので天地の区別ありか?	A: 密 B: 良好 C: 7.5YR 6/6 褐色	線刻あり
41	土師器	杯	SD02	① (15.0) ② 3.1 ③ 10.5	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面ナデ 他はヨコナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 8/4 浅黄褐色 外 5YR 6/6 褐色	底部外面板状圧痕あり
42	土師器	杯	SD02	① (15.4) ② 2.95 ③ 11.2	底部外面ヘラ切り後末調整 底部内面不定方向ナデ 他はヨコナデ	A: 密 B: 良好 C: 内 7.5YR 8/4 浅黄褐色 外 7.5YR 8/4 浅黄褐色～ 7.5YR 6/4 にぶい褐色	底部外面板状圧痕あり
43	土師器	杯	SD02	① 15.8 ② 2.85 ③ 11.3	底部外面ヘラ切り 底部内面ナデ 他はヨコナデ	A: 密 B: 良好 C: 内外 5YR 7/4 にぶい褐色	底部外面板状圧痕あり
44	土師器	杯	SD02	① (16.0) ② 2.95 ③ 11.85	底部外面ヘラ切り 底部内面ナデ 他はヨコナデ	A: 密 B: 良好 C: 内外 7.5YR 7/3 にぶい褐色	底部外面板状圧痕あり
45	土師器	鍋	SD02	① (42.6) ② (17.1)	内外面ナデ 外面指頭圧痕あり	A: やや密 B: 良好 C: 内 5YR 7/6 褐色～ 5YR3/1 黒褐色 外 5YR 5/4 にぶい赤褐色～ 5YR2/1 黒褐色	外面煤付着
46	土師器	鍋	SD02	② (6.8)	内面削り 頸部外面指頭圧痕あり	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 6/4 にぶい褐色 外 7.5YR 7/3 にぶい褐色～ 7.5YR 4/1 褐灰色	体部外面煤付着
47	須恵器	鉢	SD02	② (4.4)	内外面回転ナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内外 2.5Y 5/1 黄灰色	
48	瓦器	椀	SD02	① (16.25) ② 5.45 ④高台径 7.0	内外面ミガキ 口縁部内面一部コテ当て痕あり 体部外面下位指オサエ	A: やや密 B: 良好 C: 内 2.5Y 7/3 浅黄色～ 2.5Y 3/1 黒褐色 外 2.5Y 7/2 灰黄色～ 2.5Y 3/1 黒褐色	重ね焼き痕あり
49	瓦器	椀	SD02	① (16.6) ② 5.75 ④高台径 6.2	底部外面ヘラ切り後回転ナデ 内面～体部外面ミガキ 底部内外面指頭圧痕あり	A: やや密 B: 良好 C: 内 10YR 7/3 にぶい黄褐色 外 10YR 2/1 黒色	底部外面板状圧痕あり
50	瓦器	椀	SD02	① (16.6) ② 5.1 ④高台径 6.3	底部外面ヘラ切り後ナデ 体部外面下位ヘラ削り 内面～体部外面ミガキ 底部内面指頭圧痕あり	A: 密 B: 不良 C: 内 10YR 8/3 浅黄褐色 外 10YR 7/4 にぶい黄褐色～ 10YR 8/2 灰白色	
51	白磁	椀	SD02	① (14.0) ② (4.4) ④高台径 (5.6)	内面～体部外面施釉	A: 精良 B: 良好 C: 釉 2.5Y 7/1 灰白色 胎土 7.5Y 8/1 灰白色 露胎 2.5Y 5/2 暗灰黄色	見込み蛇の目釉剥ぎ 太宰府分類Ⅷ類

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※ (復元値) < 残存値 >	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
52	白磁	椀	SD02	② (6.05) ④高台径 6.1	内面～体部外面施釉	A: 精良 B: やや軟質 C: 釉 10YR 7/2 にぶい黄橙色 胎土 10YR 8/2 灰白色	太宰府分類V類
53	白磁	椀	SD02	① 17.8 ② 7.5 ④高台径 6.6	内面～体部外面施釉	A: 精良 B: 良好 C: 釉 7.5Y 7/2 灰白色 胎土 10Y 7/1 灰白色	太宰府分類V-4類
54	白磁	椀	SD02	② (3.1) ④高台径 7.4	内面施釉 体部外面ヘラ削り	A: 精良 B: 軟質 C: 釉 10YR 7/2 にぶい黄橙色 胎土 7.5YR 7/4 にぶい橙色～7.5YR 4/1 褐灰色	
55	瓦質土器	湯釜	SD04	② (6.0) ⑤ (26.0)	内外面指オサエ 内面ハケ目の痕跡	A: 密 B: 良好 C: 内 2.5Y 5/1 黄灰色 外 10YR 6/2 灰黄褐色～10YR 3/1 黒褐色	外面煤付着
56	弥生土器	甗	SK01	① (33.4) ② (10.3)	体部外面ハケ目 内面調整不明 他はヨコナデ	A: やや粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 7/4 にぶい橙色 外 5YR 7/6 橙色～5YR 6/6 橙色	
57	弥生土器	甗	SK01	① (23.5) ② (6.1)	体部外面調整不明 内面ナデ 他はヨコナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 5YR 6/4 にぶい橙色 外 2.5YR 6/6 橙色	
58	弥生土器	甗	SK01	② (10.35) ③ 9.5	底部外面ナデ 内面指オサエ 体部外面ハケ目 内面調整不明	A: やや粗 B: 良好 C: 内 10YR 7/3 にぶい黄褐色～10YR 4/1 褐灰色 外 5YR 6/6 橙色	
59	弥生土器	甗	P-23	① (28.6) ② (7.4)	体部外面ハケ目 内面ナデ 口縁部内外面ヨコナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 6/4 にぶい橙色 外 7.5YR 6/6 橙色	
60	弥生土器	甗	P-38	② (4.65) ③ (8.2)	外面ハケ目 内面調整不明	A: 粗 B: 良好 C: 内 7.5YR 7/4 にぶい橙色 外 5YR 6/6 橙色	
61	土製品	不明	遺構検出時	残存長 9.0 残存幅 7.5 厚さ 3.0	木目の痕跡あり 擦痕あり	A: 密 B: 軟質 C: 7.5YR 8/3 浅黄褐色	
62	石製品	石鎌	P-72	長さ 2.1 幅 1.8 厚さ 4.0 重さ 0.8 g			黒曜石製
63	石製品	石庖丁	P-23	残存長 2.45 残存幅 4.7 厚さ 0.45 重さ 5.9 g			粘板岩製

松葉園遺跡第3次調査遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※ (復元値) < 残存値 >	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
64	弥生土器	蓋	SC02	① (35.0) ② 11.7 頂部径 6.8	口縁部内面ハケ目 外面全面ハケ目 頂部内面シボリ痕あり	A: 密 B: 良好 C: 内 5YR 5/6 明赤褐色 外 7.5YR 7/4 にぶい橙色～7.5YR 3/1 黒褐色	外面黒斑
65	弥生土器	甗	SC02	② (3.5)	内外面調整不明	A: やや密 B: 良好 C: 内外 7.5YR 7/4 にぶい橙色	
66	弥生土器	甗	SC02	① (34.0) ② (2.6)	口縁部平坦面ハケ目 他はナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 5YR 6/8 橙色	
67	弥生土器	甗	SC02	② (6.0) ③ 7.4	外面ハケ目 他は調整不明	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 7/8 黄褐色 外 7.5YR 8/6 浅黄褐色～7.5YR 6/8 褐色	
68	弥生土器	甗	SC02	② (14.5) ③ (12.2)	外面ハケ目 内面ナデ?	A: やや密 B: 良好 C: 内 5YR 7/6 褐色 外 7.5YR 7/4 にぶい橙色～7.5YR 3/1 黒褐色	外面一部煤付着
69	弥生土器	壺	SC02 床面直上	② (4.5) ③ 8.4	外面ハケ目後ナデ 内面調整不明	A: 密 B: 良好 C: 内外 7.5YR 6/2 灰褐色	底部外面黒斑あり
70	弥生土器	鉢	SC02	① 14.2 ② 11.0 ③ 6.4	内外面ナデ?	A: 粗 B: 良好 C: 内外 5YR 6/6 褐色	
71	弥生土器	器台	SC02	①上端径 (11.2) ② 18.4 ③下端径 13.2	外面ハケ目 他は調整不明	A: やや密 B: 良好 C: 内外 5YR 6/6 褐色	
72	弥生土器	器台	SC02	② (14.8) ③下端径 12.8	外面ハケ目 他は調整不明	A: やや粗 B: 良好 C: 内外 7.5YR 7/6 褐色	
73	弥生土器	支脚	SC02	② (6.15) ③下端径 7.6	外面下位指オサエ 他はナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内外 5YR 7/8 褐色	
74	弥生土器	支脚	SC02	② (8.7) ③下端径 (12.0)	指オサエ成形か	A: やや粗 B: 良好 C: 内外 5YR 6/6 褐色・5YR 6/2 灰褐色	
75	弥生土器	支脚	SC02	①上端径 9.8 ② 17.75 ③下端径 (10.0)	指オサエ成形か	A: やや密 B: 良好 C: 内外 7.5YR 6/1 褐灰色～7.5YR 8/3 浅黄褐色	
76	白磁	椀	ST01	① 16.3 ② 6.3 ④高台径 7.0	底部外面回転ヘラ削り 内面～外面上位施釉	A: やや粗 B: 良好 C: 釉 2.5YR 8/3 淡黄色 露胎 10YR 7/2 にぶい黄褐色	削り高台
77	白磁	椀	ST01	① 16.6 ② 7.0 ④高台径 6.8	底部外面回転ヘラ削り 内面～外面上位施釉 内面一部露胎	A: 精良 B: 良好 C: 釉 2.5Y 7/3 浅黄色 露胎 10YR 8/3 浅黄褐色	削り高台 貫入あり
78	瓦器	椀	SK02	① 17.0 ② 5.4 ④高台径 6.8	底部外面ヘラ切り 内外面ミガキ 外面一部指オサエ	A: 密 B: 良好 C: 内 10YR 7/2 にぶい黄褐色～N6/ 灰色 外 N3/ 暗灰色	重ね焼き痕あり
79	白磁	皿	P-41	② (2.1)	内面～外面上位施釉	A: 精良 B: 良好 C: 釉 10YR 7/2 にぶい黄褐色 露胎 2.5Y7/1 灰白色	
80	土師器	鉢	P-60	① (14.4) ② 6.0	内外面ナデか?	A: やや密 B: 良好 C: 内外 5YR 5/6 明赤褐色	口縁部外面線刻あり
81	土師器	鉢	P-60	② (5.1)	底部外面手持ちヘラ削りか? 他は削り後ナデ	A: やや密 B: 良好 C: 内 7.5YR 7/6 褐色 外 5YR 5/6 明赤褐色	外面黒斑あり

圖 版



第 2 次調査 SD01出土遺物



(1) 第2次調査区全景 (北半)



(5) 第2次調査 SD01



(2) 第2次調査区全景 (南半)



(6) 第2次調査 SD01遺物出土状況近景



(3) 第2次調査 SC01全景



(7) 第2次調査 SD02断面



(4) 第2次調査 SC01遺物出土状況



(8) 第2次調査 SK01

図版3



(1) 第3次調査区全景 (A区北半)



(5) 第3次調査 ST01全景



(2) 第3次調査区全景 (A区南半)



(6) 第3次調査 ST01遺物出土状況近景



(3) 第3次調査区全景 (B区)



(7) 第3次調査 SK02全景



(4) 第3次調査 SC02

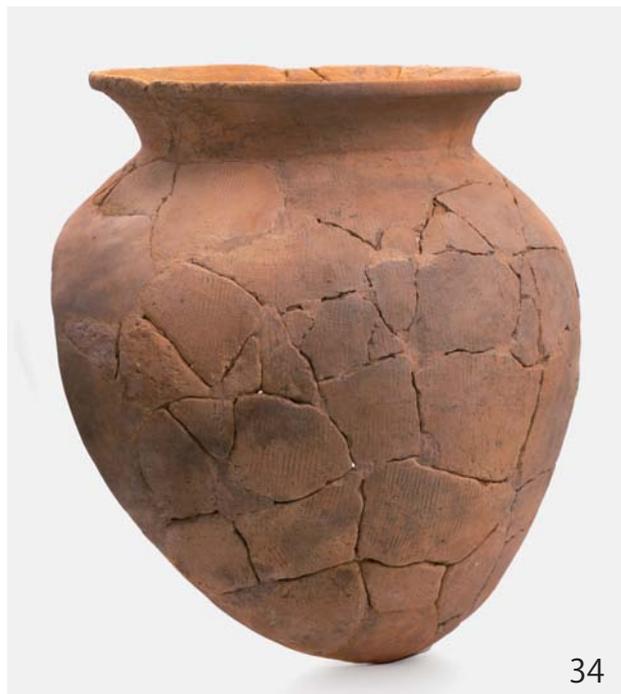


(8) 第3次調査 SK02遺物出土状況



图版 5









图版 9



報告書抄録

ふりがな	まつばぞのいせき							
書名	松葉園遺跡4							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第199集							
編著者名	林潤也・上田龍児・石川健							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まつばぞのいせき 松葉園遺跡 第2次調査	ふくおかけんおおのじょうしおとがな 福岡県大野城市乙金 1丁目781-1			33° 32′ 42″	130° 29′ 36″	2003.9.16 ～ 2003.11.28	240㎡	共同住宅 建設
まつばぞのいせき 松葉園遺跡 第3次調査	ふくおかけんおおのじょうしおとがな 福岡県大野城市乙金 1丁目784-1・2, 785-2			33° 32′ 44″	130° 29′ 37″	2007.8.20 ～ 2007.11.1	450㎡	医療施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松葉園遺跡 第2次調査	集落等	弥生時代・ 古墳時代・ 平安時代	竪穴住居・土坑・ 溝	弥生土器・土師器・ 須恵器・白磁				
松葉園遺跡 第3次調査	集落・ 墓地等	弥生時代・ 平安時代	竪穴建物・土坑・ 土坑墓	弥生土器・瓦器・ 土師器・白磁				
要約	調査地は、乙金山から派生する低丘陵上に位置する。調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居跡や土坑、古墳時代前期の竪穴建物跡、古墳時代後期の溝状遺構、平安時代の土坑墓などが検出された。古墳時代後期の溝状遺構（2次SD02）からは、焼け歪んだ須恵器を多く含む一括性の高い土器群とともに、移動式カマドや板状土製品2点も出土した。編年的な位置づけだけではなく、使用状況を分析する上でも興味深い。平安時代の土坑墓（3次ST01）からは11世紀後半～12世紀前半の白磁椀が出土した。平安時代後期～鎌倉時代の乙金山地区の開発史を考える上でも貴重な成果といえる。							

大野城市文化財調査報告書第199集

松葉園遺跡 4

令和4年3月31日

発行 大野城市教育委員会
〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷
〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号

